

10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20

昭和十三年十二月

會

報

第一〇回

浦和中學校同窓會

各回會員數

一回	二回	三回	四回	五回	六回	七回	八回	九回	一〇回
二八名	三二名	四三名	四〇名	四九名	五〇名	四七名	四九名	四八名	四二名
一一回	一二回	一三回	一四回	一五回	一六回	一七回	一八回	一九回	二〇回
五六名	五四名	五九名	四九名	五八名	四五名	四〇名	四五名	五七名	五九名
二一回	二二回	二三回	二四回	二五回	二六回	二七回	二八回	二九回	三〇回
六九名	六四名	九一名	八七名	八四名	八三名	八一	一〇八名	一一一名	一二二名
三一回	三二回	三三回	三四回	三五回	三六回	三七回	三八回	三九回	計
一二三名	一三二名	一五三名	一六九名	一六六名	一七六名	一五二名	一七四名	一七九名	三二七四名

會

報

第一〇回

目次

會則	二
會員移動報告	三
特別會員	三
正會員	五
總會記事	三三
會計報告	三四
陣中だより	三五
戰死會員思ひ出	一
應召會員氏名	老

會 則

昭和十年十一月改正

- 第一條 本會ハ浦和中學校同窓會ト稱ス
- 第二條 本會ハ會員相互ノ情誼ヲ温メ併セテ提携ヲ圖ルヲ以テ目的トス
- 第三條 本會々員ハ左ノ二種トス 特別會員(本校現職及舊職員) 正會員(本校卒業生) 但シ曾テ本校ニ籍ヲ置キタルモノハ之ヲ正會員トナスコトヲ得
- 第四條 本會ニ左ノ役員ヲ置ク 幹事 若干名、評議員若干名但シ各回ノ卒業生ヨリ二名以上
- 第五條 役員ノ職務ハ左ノ如シ 幹事中ノ學校職員ヲ常任幹事トナシ本會ノ事務ヲ統括處理ス 幹事評議員ハ本會ノ重要ナル事項ヲ議定ス
- 第六條 幹事及評議員ハ會員中ヨリ總會ニ於テ之ヲ選舉ス 其任期ハ各四年トス
- 第七條 本會ハ本校々長ヲ顧問ニ推戴ス
- 第八條 本會ハ毎年一回十一月三日ニ總會ヲ開ク 但シ臨時會ヲ開クコトヲ得
- 第九條 本會ハ毎年一回會員ノ狀況ニ關スル會報ヲ頒ツ
- 第十條 會員ハ職業住所及主ナル動靜ニ關シ異動アリタル時ハ事務所ニ報告スルモノトス
- 第十一條 正會員ハ維持費トシテ金三圓ヲ本會ニ納付スル義務アルモノトス
- 第十二條 本會事務所ハ浦和中學校内ニ置ク
- 第十三條 本會ニ左ノ帳簿ヲ備フ 一、會員名簿 一、會計簿 一、總會議事錄
- 第十四條 本規則ハ總會出席員ノ三分ノ二以上ノ同意ヲ以テスルニアラザレハ之ヲ變更スルコトヲ得ス

會員移動報告

特別會員

現 職 員

現 職 員	現 職 員
阿部大三郎 (英 語)	東京市世田谷區上北澤一ノ二六七ノ七
荒井四十一 (書記、教練)	北足立郡與野町大字下落合一〇六二
池田俊司 (教 練)	浦和市仲町四ノ一四四
大島正喜 (英 語)	浦和市常盤町四ノ七二
角澤良男 (數 學)	浦和市仲町四ノ一〇八
櫻井 靜 (地 理)	浦和市本太寺前六四八
田代 淳 (教 練)	北足立郡六辻町別所二、〇二九ノ二
高塚武夫 (國語、漢文)	浦和市岸町四ノ一八一
中根研三 (國語、漢文)	浦和市常盤町三ノ一〇九
平尾康造 (數 學)	浦和市常盤町五ノ一一四
平田武彦 (漢 文)	浦和市常盤町五ノ一二八
藤田徳治 (教 練)	浦和市仲町六ノ一〇〇鹿島寮(桐生市宮本町一三八〇)

舊職員

藤中博 (數) 北足立郡六辻町別所一、二、三、七
 堀井信義 (劍道、作業) 浦和市常盤町三ノ五二
 丸山豊吉 (教 練) 浦和市大田窪一三七五

職 員

阿部 鵬二 東京市杉並區和田本町六七五
 井上安三 川越市小仙波四
 井上忠義 廣島縣臨學務課
 稻見越城 浦和市岸町二ノ二二九
 大日方秋男 東京市板橋區小竹町二四一一
 河村幸造 浦和市高砂町一ノ九四
 外賀 猶一 三重縣富田町二六一
 小島德次郎 東京市中野區鷺宮一ノ五
 高橋 俊人 東京市王子區赤羽町四ノ二〇七一
 高橋 壽 浦和市常盤町五ノ四九ノ一
 長岡直次 中華民國上海法租界上海自然科學研究所內
 出牛福藏
 富山一郎
 長尾義明

職 員

陸軍豫科士官學校教授
 陸軍工兵中佐、川越中學校配屬將校
 廣島縣視學官
 陸軍歩兵大佐、東京航空學校囑託
 晋北自治政府大同府晋北學院教授
 東京市立高輪工業學校教諭
 陸軍工兵少佐、金澤工兵第九聯隊留守隊長
 三重縣立富田中學校教諭
 東京府立高等家政女學校教諭
 京北齒科醫學校講師
 東京電鳴中學校教諭
 理學博士、上海自然科學研究所員
 大阪府經濟部糧度課勤務

野崎幸香

北埼玉郡笠原村大字安養寺

農

茨城縣龍ヶ崎中學校教師

野村春光

島根縣濱田町大字淺井九六四ノ三

成城高等學校教授

本多貞彦

前橋市高田町九五

島根縣立濱田中學校長

福間俊次郎

前橋市北三條東十丁目

丸山正康

浦和市仲町四ノ一三三

宗教家

東京府立第十中學校教諭

松本昇陽

和歌山縣立田邊中學校教諭

茨城縣立石岡高等女學校教諭

三井政雄

山口縣立豊浦中學校長

(死亡)

三橋秀郎

東京市下谷區谷中眞島町一ノ四號

東京本郷專修商業學校教師

望月恒雅

和歌山縣立田邊中學校教諭

和歌山縣立田邊中學校教諭

柳田加藤次

和歌山縣立田邊中學校教諭

和歌山縣立田邊中學校教諭

山本政喜

和歌山縣立田邊中學校教諭

和歌山縣立田邊中學校教諭

吉田一路

和歌山縣立田邊中學校教諭

和歌山縣立田邊中學校教諭

正 會 員

第一回 牧田 清吉 朝鮮大邱府大鳳町二九一
 第四回 山口 一郎
 第五回 井上 英

正 會 員

新潟市長

五

(死亡)

正會員

- 第六回 山本 厚
- 第七回 鈴木 泰壽
- 第一〇回 大川 明 神奈川縣鎌倉郡大船町岡本七四三
- 第二回 伊丹 進
- 川鍋卯平二
- 第三回 山口榮太郎 神戸市灘區高羽橋丘一六
- 第二〇回 土肥 政美 靜岡縣磐田郡大袋町豊澤
- 第三回 山本桂一郎
- 第三回 坂巻 孝策
- 東海林伴治
- 第二四回 齊藤司馬男 北足立郡大宮町鐵道官舎三四
- 額賀 大興 山口縣豊浦郡勝山村住吉神社官舎
- 第二五回 淺子 英 本溪湖東山三五
- 淺見 信愛 新潟縣新發田町地藏堂町
- 平山 常時 愛知縣西加茂郡學母町二一 卜々々自動車株式會社々々
- 第二四回 小島 五六 浦和市針ヶ谷五三
- 兒玉幸太郎
- 齊藤 正 札幌市南四條西十六丁目

川口市厚生課長

六

(死亡)

北足立郡笹目小學校長
第一生命保險相互會社仙臺支部勤務
北葛飾郡三輪野江小學校長
鐵道車輛用材協議會勤務

青森縣下北郡田名部町公立田名部病院勤務
熱河省農事合作社聯合會主事
技工見習教育所幹事、鐵道局書記大宮工場保健科勤務
官幣中社住吉神社宮司
奉天省本溪縣副縣長
新潟縣立新發田高等女學校教職
卜々々自動車工業株式會社勤務
醫學博士
商工省商務局商政課勤務
北大醫學部細菌學教室勤務

- 島田 通男 千葉市東本町四一
- 田畑 禎治 哈爾濱市馬家溝協和街三九協和アパート
- 平田 一郎 岡山市南方五六三
- 山崎 市郎 大阪市外千里村天道二九三一
- 堀杉 瓦一
- 第二七回 白倉 吉三 東京市大森區北千束町三九九
- 內村 太郎 橫濱市中區境の谷一一
- 小川 洋
- 大熊初太郎
- 高橋 瓦節 東京市淀橋區戸塚町三ノ三一九
- 長村 利綱 大阪府濱寺町船尾八五四
- 引間 三雄 浦和市岸町六ノ八五
- 第二八回 井原文次郎 京都市左京區北白川別當町九二
- 市川伊三郎 東京市豊島區高田本町一ノ三三四
- 金井 尙夫
- 神田 佛樹 浦和市岸町四ノ一六二
- 永瀨 好二 滿洲國安奉線通遠堡驛氣付
- 藤井一五郎 東京市板橋區板橋町一ノ二四三九
- 細淵美代治

哈爾濱放送局技術課長

日本勸業銀行浦和支店勤務

安東稅關勤務
新京市小五馬路被服本廠新京派出所代理所長

大阪住友信託株式會社勤務
株式會社富島組東京支店勤務

仙鐵教育所勤務(仙臺市東八番町)
大藏省專賣局製造部(東京市麹町區大手町)所勤務
滿洲鐵山株式會社青城子鐵業所勤務
產業組合中央會勤務

正會員

七

正會員

八

町田 徳治 北足立郡大宮町宮町三七四二

山田 肇

矢部 金藏

熊木 重雄

加藤 騰藏

金井 庄一

里村 千秋

助川 澄

關根喜久松

眞木 眞激

村勢 一郎

町田 一男

小川 勇司

大塚 俊一

折原 正

鈴木 精一

高橋 博

野澤 統司

天沼 次郎

所澤商業學校教諭

北足立郡戸田郵便局長

羽田飛行場勤務

平井分院勤務(東京市大森區新井宿四ノ二五)

阪大醫卒

陸大在學

四年修了

松本高等學校教授

庶民金庫貸付課勤務

埼玉縣川口工業學校教諭

埼玉縣經濟部農務課勤務

陸軍省恤兵部勤務

大阪商船株式會社りわでじやれいる丸機關士

陸軍歩兵大尉、陸軍經理學校附

靜岡縣濱松第一中學校教諭

東大文卒

(死亡)

(死亡)

正會員

九

久保村 茂

小室 敏治

澁谷 一男

杉本 象士

竹村亥代三

網島 竹治

茂木 崧

松村 常吉

石川 正二

折田 兼完

神山 晃一

黒住 一夫

鈴木 正光

水谷 充

奥田 重藏

清水 正夫

島田 淑雄

望月 敏

浦和市常盤町四ノ八八

浦和市常盤町四ノ八八

浦和市常盤町四ノ八八

浦和市常盤町四ノ八八

浦和市常盤町四ノ八八

浦和市常盤町四ノ八八

浦和市常盤町四ノ八八

浦和市常盤町四ノ八八

浦和市常盤町四ノ八八

浦和市常盤町四ノ八八

浦和市常盤町四ノ八八

浦和市常盤町四ノ八八

浦和市常盤町四ノ八八

浦和市常盤町四ノ八八

浦和市常盤町四ノ八八

浦和市常盤町四ノ八八

浦和市常盤町四ノ八八

浦和市常盤町四ノ八八

浦和市常盤町四ノ八八

浦和市常盤町四ノ八八

浦和市常盤町四ノ八八

浦和市常盤町四ノ八八

浦和市常盤町四ノ八八

浦和市常盤町四ノ八八

浦和市常盤町四ノ八八

浦和市常盤町四ノ八八

浦和市常盤町四ノ八八

浦和市常盤町四ノ八八

浦和市常盤町四ノ八八

浦和市常盤町四ノ八八

浦和市常盤町四ノ八八

浦和市常盤町四ノ八八

浦和市常盤町四ノ八八

浦和市常盤町四ノ八八

浦和市常盤町四ノ八八

浦和市常盤町四ノ八八

浦和市常盤町四ノ八八

浦和市常盤町四ノ八八

浦和市常盤町四ノ八八

扶桑海上火災保險株式會社新

京支店大連出張所勤務(大連市東公園町三五)

千葉縣木更津高等女學校教諭

清水水産株式會社千代田工場長

三共株式會社品川工場第五科

勤務(東京市品川區西品川一ノ八八)

臺南師範學校勤務

海軍技術研究所庶務課勤務

函館在泊特務艦大泊乘組海軍

主計中尉

昭和製鋼所勤務(滿洲國鞍山

市仲江町)

都市計畫鹿兒島地方委員會勤務

南滿洲鐵道株式會社勤務

法大法卒

(死亡)

(死亡)

東大醫卒

三菱商事株式會社奉天出張所

勤務

東京府立第十高等女學校教諭

浦和市常盤町四ノ八八

浦和市常盤町四ノ八八

浦和市常盤町四ノ八八

浦和市常盤町四ノ八八

浦和市常盤町四ノ八八

浦和市常盤町四ノ八八

浦和市常盤町四ノ八八

浦和市常盤町四ノ八八

浦和市常盤町四ノ八八

浦和市常盤町四ノ八八

正會員

第三四回

伊藤 元博 札幌市北十六條西五丁目 北陽館内
飯塚 隆雄 東京市品川區大井立會町五〇〇
石橋 武 東京市品川區大井立會町五〇〇
岡田 讓 東京市瀧野川區田端三二五

日立製作所本社勤務 (東京市
麴町區丸ノ内)
日大高工建築科
在學

小笠原龍男 東京市瀧野川區田端三二五
小暮達次郎 浦和市常盤町五ノ一四一
齊藤清次郎 福島市外森合山根三〇 耕野方
富永 守之 神戸市林田區片山町二ノ四五

關島高商在學

増子 靜夫 滿洲國新京西五馬路德興ビル内
高山 淨 東京市芝區西久保山城町五 伊藤方
野口 邦雄 川崎市松江町五三八 戸澤屋方
吉田 真治 東京市牛込區算術町一ノ三

昭和産業株式會社勤務 (東京
市京橋區室町味ノ素ビル)
埼玉縣立農藝學校教諭
立大文卒

第三五回

秋山 勉 青島市陵縣路一七 陵縣莊内
有江 一雄 東京市淀橋區角管一ノ一 池田仲次郎方
伊藤 英雄 東京市芝區芝公園四號地御成門鐵道官舎
伊藤 長邦 東京市荒川區町屋二ノ四二二
市ノ川惠士 東京市荒川區町屋二ノ四二二
尾住 秀 新京豊樂胡同二二三 清明寮
押兼 正廣 帝國練習艦隊八雲飛艇

滿鐵北支配給班青島支部
海軍少尉候補生
海兵卒

近田 裕 滿洲國齊々哈爾滿洲電信電話株式會社齊々
哈爾放送局
内藤 大吉 川崎市大島町四ノ五二

アナウンサー

林 春二 東京市葛飾區下小松町六七八
矢部 博 東京市荏原區中延町一〇三二

東京市立高輪工業學校教諭
青山學院卒

第三六回

石井 賢一 新潟縣柿崎町仲町理研ピストン工場内
石貝 登 郡山市虎丸町七〇
市來 乙純 東京市王子區岩淵町一ノ三八八
大澤 俊一 東京市王子區岩淵町一ノ三八八
小島 晋一 滿洲國鞍山北四條町 鈴鹿寮
小林 信助 滿洲國鞍山北四條町 鈴鹿寮
澁谷 謙三
武藤 傳

日本電氣株式會社玉川向工場
勤務
日東紡績株式會社富久山工場
勤務
橫高工卒
橫高工在學
東大法在學
桐生高工卒
(死亡)

山岸 義司 帝國練習艦隊警手乘組
高橋 卓郎 津市上濱町三重高農三翠寮内
金子 表 東京市杉並區西田町四二八
神山徹四郎
岸村 惠生
鈴木 早苗 浦和市仲町二ノ一〇
長谷川喜之 北足立郡笹目村下笹目七五〇

株式會社丸紅商店東京支店勤
務 (東京市日本橋區高深町)
滿洲國國務院地籍整理局錦州
省盤山縣支局勤務
海軍少尉候補生
福島高商卒
地籍員養成所卒
海兵卒
三重高農在學
(死亡)

正會員

一一

早大專在學

正會員

- 荒井 盛光
- 鈴木 泰雄
- 馬場 健
- 松本 章
- 吉野 康彦 浦和市常盤町九ノ一八二
- 脇屋 義夫 横濱市中區大岡町字寺ノ下二二八
- 市川 義光 東京市淀橋區淀橋三三五

共立汽船代理三井物産船部

目黒無電卒
慶大豫在學
(死亡)
(死亡)

横濱高工在學

農林省後鵜丸乘組通信士

第三九回

(昭和十三年三月) 一七九名

- 阿部 吉男 浦和市高砂町四ノ一六一
- 相澤 親雄 (北足立郡大宮町上天沼三三四)
- 青山 一雄 浦和市岸町三ノ一三三
- 朝比奈 一郎 北足立郡與野町大字與野四二三
- 荒井 重幸 浦和市仲町四ノ二二九
- 新井 義夫 浦和市常盤町四ノ三九九
- 荒川 尙男 浦和市仲町五ノ一五五
- 井澤 正一 浦和市高砂町警察官教習所備
- 伊藤 春城 浦和市高砂町二ノ一七六
- 伊藤 光臣 浦和市仲町一ノ三〇

東日浦和支局勤務

東京齒科在學

海機在學
大倉高商在學
明治藥專在學

猪野 剛 川口市榮町一ノ四八

飯田 啓造 北足立郡大宮町堀之内三區二七一五

飯塚 史郎 川口市前川町一ノ二一五四

石井 周一 浦和市高砂町一ノ一八〇

石井 清 川口市榮町三ノ一一一

石川 幸一 川口市壽町九七

石田 一郎 北足立郡鳩ヶ谷町一、八〇六

石田 實 北足立郡鳩ヶ谷町辻一、四二二

石原 健一 北足立郡朝霞町字台七八三

磯部 秀雄 北足立郡六辻町大字別所一、三六六

市田 幸彦 (北足立郡大宮町高鼻一七)

今泉 良政 北足立郡芝村三八

今西 誠一 東京市王子區上十條町一、二六一

岩崎 政晃 浦和市岸町七ノ四四

一木 秀之 浦和市本太四五

上村 元太 北足立郡大宮町大字大宮三、八三五

浦上 輝彦 東京市王子區赤羽町一ノ二〇三

漆原 日出雄 浦和市岸町四ノ一九〇

梅津 庄造 東京市澁野川區澁野川町三、三〇六

中大豫在學

東商船在學
慶大豫在學
慶大豫在學

中野無線在學
米高工在學
明大豫在學

慶大豫在學

正會員

正會員

- 惠藤 仁三 浦和市岸町三ノ三三一
- 榎本 福壽 北足立郡土合村山久保六五
- 小川 義春 浦和市針ヶ谷八八四
- 小川 麟太郎 (北足立郡藤町四、六五八)
- 小口 俊明 北足立郡與野町上落合八六九
- 小高 一成 北足立郡大宮町大字大宮四、〇五三
- 小野里 公伸 浦和市岸町七ノ一七
- 小野里 公靖 浦和市岸町七ノ一七
- 大野 富司 北足立郡大宮町仲町四、〇〇五
- 大原 浩 浦和市常盤町七ノ四〇
- 真地 敏夫 浦和市高砂町四ノ九九一
- 岡上 和雄 浦和市常盤町三ノ一二三
- 岡村 俊夫 浦和市常盤町四ノ一三
- 勝 信次 浦和市常盤町六ノ一
- 門井 四行 浦和市常盤町四ノ六七 長島恭助方
- 金倉 剛敬 浦和市常盤町七ノ五三
- 金子 幸司 北足立郡大宮町大字大宮三、二五二
- 金子 久 浦和市仲町四ノ一一七
- 金子 博 浦和市仲町一ノ一

慶大高在學

海兵在學

桐生高工在學

早專在學

日本齒科在學

野村證券東京支店勤務

慶大豫在學

新高在學

中野無線在學

- 川島 恂二 茨城縣猿島郡古河町北新町
- 木内 哲期 (浦和市常盤町一ノ四七)
- 木村 圭助 北足立郡鴻巣町二、三八六ノ一
- 熊谷 峻 東京市豊島區長崎南町二ノ一、九七六
- 倉田 敏郎 東京市日本橋區兩國一、二ノ一
- 栗原 輝雄 浦和市高砂町一ノ六二
- 小泉 又彦 浦和市高砂町二ノ八八
- 小島 一馬 北足立郡大宮町土手宿一五二
- 小林 文雄 北足立郡六辻町別所一、二〇三
- 小林 道夫 (浦和市大字本太一、三八八)
- 小館 隆昌 (浦和市岸町六ノ八五)
- 小宮 賢三 東京市日本橋區馬喰町三ノ三ノ五
- 鴻巣 茂 浦和市縣廳官舎
- 後藤 國一 浦和市高砂町五ノ一〇
- 後藤 博 川口市本町三ノ二一
- 駒井 清 北足立郡與野町大字大月七二
- 早乙女 敏雄 浦和市仲町四ノ七
- 佐藤 榮一 (東京市王子區王子町六七九)
- 佐山 秀一 浦和市岸町七ノ一六ノ一

正會員

海兵在學

橫商專在學

大倉高商在學

東商船在學

陸豫士在學

陸豫士在學

日大理在學

東藥專在學

橫高工在學

米高工在學

- 坂本正太郎 川口市青木町四三〇三四
- 酒井達雄 (茨城縣猿島郡古河町六一二一)
- 志賀 惟夫 (橫濱市神奈川區白幡町)
- 清水日出雄 (北足立郡與野町大戸四三二)
- 靜間 申如 (東京市王子區上十條町一、三三六)
- 柴崎 堯 (北足立郡鳩ヶ谷町大字前田三六八)
- 島田 誠 (東京市足立區島根町七〇二)
- 須關 焘一 (浦和市本太一、〇八八)
- 杉浦 佳祐 (浦和市常盤町三丁目)
- 杉本 貞雄 (北足立郡大久保村在家一三九)
- 鈴木 靖明 (東京市澁谷區千駄谷五六ノ九六七)
- 鈴木 令夫 (浦和市仲町一ノ九五)
- 勝 猛 (南埼玉郡蓮田町九一八)
- 關 幸一郎 (北葛飾郡栗橋町三、四一七)
- 關 錄 郎 (東京市杉並區天沼三ノ七九四)
- 關 田 武 (南埼玉郡岩槻町二、五二五)
- 田口善三郎 (北足立郡蕨町御殿町四、四六六)
- 田口甚兵衛 (浦和市高砂町五ノ一六七)
- 田口 孝文 (東京市王子區稻付西町六ノ三三五)

日本電氣勤務

- 專大豫在學
- 水高在學
- 二高在學
- 長岡高工在學
- 海兵在學
- 第二早高在學
- 拓大豫在學
- 明治藥專在學
- 陸豫士在學
- 日大專在學

- 田 浩 穂 (川口市本町三ノ一〇八)
- 高 木 泰 (南埼玉郡清久村字子清久)
- 高 瀬 晋二 (浦和市常盤町五ノ一二八)
- 高 瀬 一 (北足立郡大宮町大字大宮二、八七八)
- 高 田 操 (浦和市常盤町二ノ一〇七)
- 高 橋 和美 (浦和市常盤町五ノ三六)
- 高 橋 文三 (東京市王子區稱付町五ノ八七二)
- 竹 入 勝 (北足立郡大宮町大字大宮三、八二七)
- 竹野公一 (東京市荒川區日暮里町八ノ八八八)
- 竹内俊夫 (浦和市高砂町三丁目縣廳官舎)
- 武井 直 (川口市幸町三ノ一八)
- 武田武四郎 (浦和市岸町三ノ一三〇)
- 月岡和夫 (北足立郡桶川町大字桶川一、四〇五)
- 土屋五郎 (浦和市高砂町四ノ一六五)
- 照山四郎 (埼玉縣北足立郡大宮町櫻木町五五八)
- 戸井田 清 (北足立郡小針村大字大針五九)
- 利根川 榮 (東京市本所區向島須崎町七三)
- 伊窪 一郎 (北足立郡六辻町別所一、〇九二)
- 飛田正雄 (南埼玉郡蓑津村字白岡九一四)

大蔵省主税局勤務

横濱税関

- 日大豫在學
- 早大專在學
- 商大豫在學

正會員

- 富澤 勇 (浦和市常盤町三ノ四)
- 富澤 一郎 (浦和市本大二八二)
- 豊泉 芳男 (浦和市常盤町九ノ五六)
- 中里 正 (浦和市本大二、四〇六)
- 中島 義一 (浦和市仲町二ノ六四)
- 中島 芳男 (東京市豊島區池袋五ノ一九五)
- 中山 圭二 (茨城縣猿島郡古河町)
- 永見 定一 (北足立郡大宮町大字大宮三、七四一)
- 永安 寛 (浦和市岸町七ノ二四)
- 長澤 清 (浦和市岸町五ノ四九)
- 西川 博夫 (北足立郡志木町一、六一五ノ一)
- 新澤 直衛 (浦和市常盤町七ノ四三)
- 野島 迪雄 (北足立郡志木町一、六三一)
- 野中 信 (東京市荒川區町屋三ノ六四)
- 野原 宏 (千葉縣安房郡富崎村二八九)
- 羽生田 早苗 (北足立郡六辻町別所一、三五二ノ三)
- 橋口 敏幸 (浦和市常盤町六ノ七〇)
- 橋野 旭 (東京市王子區上十條町一、二三四)
- 橋本 梅太郎 (秩父郡秩父町二、四四四)

海軍甲種飛行豫科練習生

中島飛行機製作所勤務

大日本相撲協會力士

陸軍士在學
早大專在學

明大豫在學

東京鐵道局勤務

- 原田 宏 (北足立郡三橋村並木一三〇)
- 番場 修三 (浦和市大字針ヶ谷八〇〇)
- 林 彌之助 (浦和市常盤町四ノ七七)
- 林 瓦四郎 (東京市四谷區東信濃町一)
- 林田 哲夫 (北足立郡與野町下落合一、六四五)
- 平野 光郎 (川口市榮町三ノ四一)
- 廣田 正克 (北足立郡六辻町東ノ台)
- 富士 岳 (浦和市上木崎一〇六)
- 深谷 泰雄 (北足立郡與野町上町一〇四)
- 福原 平八郎 (東京市芝區田村町一ノ四)
- 藤原 藤彦 (浦和市仲町四ノ一〇〇)
- 藤井 剛 (浦和市常盤町九ノ一九七)
- 別所 弘望 (北足立郡與野町大戸四一六)
- 星野 幸男 (浦和市岸町四ノ九一)
- 細川 正人 (浦和市本大四六〇)
- 細井 泰治 (北足立郡與野町字與野七〇七)
- 堀田 邦夫 (北足立郡與野町大字大戸四四二)
- 眞木 照 (北足立郡大宮町吉備三、八九九)
- 益田 太郎 (宇都宮市大宮町二、三二九)

海軍甲種飛行豫科練習生

慶大高等在學

明治學院在學

日大豫在學

建國大學在學

早大專在學

第二早高在學

陸軍士在學
浦高在學

正會員

正會員

- 增永榮 一 浦和市岸町四ノ一六一
- 松岡泰男 東京市王子區稻付町五ノ九四二
- 松下清 浦和市本太三七八
- 松永千里 浦和市常盤町五ノ一〇八
- 松本伸一 浦和市岸町四ノ一二三
- 松本康次 北足立郡六辻町根岸三五
- 松元越夫 浦和市常盤町四ノ四二
- 丸山哲也 浦和市本太二二七六
- 三角清雄 浦和市岸町三ノ一二五
- 峰博 南埼玉郡岩槻町二、三三五
- 宮崎幸男 北足立郡大宮町四七八
- 宮澤盛一 浦和市仲町五ノ一二
- 宮部英也 浦和市仲町三ノ二六
- 宮田芳郎 東京市神田區東神田六
- 村上元彦 浦和市高砂町四ノ三八
- 村田文夫 東京市王子區稻付西町三ノ四七
- 茂木茂雄 浦和市常盤町四ノ八六
- 森谷又四郎 北足立郡大宮町土手宿一、〇七〇
- 本橋健作 北足立郡大宮町土手宿三六三

早大專在學

函館高水在學

東京齒科在學

浦高在學

慶大豫在學

豊師二部在學

山洋商會勤務

- 本木昇 北足立郡加納村大字加納四三六
- 諸深三期 (浦和市上木崎四、八九九)
- 矢崎敬三 浦和市常盤町七ノ三〇
- 矢作哲治 北足立郡鳩ヶ谷町字里一、一五五
- 山之内一彦 北足立郡大宮町櫻木町北區一、一一三
- 山田俊一郎 浦和市前地三四〇 高柳方
- 山野一雄 浦和市高砂町五ノ七八
- 山本史郎 浦和市仲町四ノ七四
- 弓削田正明 (北足立郡尾間木村大字中尾一、六二六)
- 行岡真一 (浦和市本太一三七 竹下愛子方)
- 横井孝之 東京市瀧野川區上中里町一六七
- 吉澤章 浦和市仲町三ノ六四
- 吉田正敏 京都市左京區下鴨宮崎町二二八
- 米田甫 川口市榮町一七
- 六城雅 浦和市仲町四ノ八九
- 渡部榮二 川口市榮町三ノ三三七
- 渡邊武 北足立郡與野町下落合二六五二

長岡高工在學

日大豫在學

中大豫在學

橫濱高工在學

債登高工在學

東京高工學在學

電機學校在學

第三九回

正會員

正 會 員

111

飯島 敏光 (東京市牛込區市ヶ谷町佐内町九)

陸軍士在學

横江 吾一

第一期甲種飛行練習生
(三重縣鈴鹿海軍航空隊第十二分隊)

渡邊 敬夫 (浦和市高砂町二ノ一六五)

陸軍士在學

第四〇回

(四年修了者)

内田 照次郎 (浦和市岸町四ノ一七)

陸軍士在學

杉 全 西二 (浦和市岸町一ノ三三)

海軍在學

富田 治 邦 (北足立郡大宮町土手宿五〇九)

第一高無線在學

針ヶ谷 和男 (茨城縣猿島郡古河町六、一六六)

陸軍在學

比留間 忠夫 (北足立郡朝霞町大字關五七七)

陸軍士在學

平 柳 育 郎 (浦和市仲町四ノ五二)

海兵在學

柳 澤 滿 (浦和市高砂町四ノ二二)

陸軍士在學

第四一回

(四年修了者)

内田 忠 彦

横須賀市海軍甲種飛行操科練習生

總 會 記 事 其 他

○十一月三日午後一時母校博物室に第十五回總會を開催。折悪しく雨天のため出席者少数。今井顧問、阿武先生、高田、土肥、土橋、井上各幹事の他に、第十一回水野辰男君、阪藤君、第十五回石川清隆君、第十七回大澤禎郎君、第十八回林彰君、第三十五回石井享君、桃木健治君出席。會計報告(別紙参照)あり。次で時局に鑑み本年度「會報」は紙數其他の節約を計る爲め、單に移動報告を寄せられたる會員諸君に就いてのみ名簿の訂正を行ふ件を計り、原案通り決定。次に第三十一回卒業生たるべき中途退學の松本喜一君の入會の件を決定。之にて總會を閉ず。別に今井顧問より中途退學者を會員に推薦しては如何との御提議あり。

○支那事變既に一年有半に垂んとして、會員中或は支那に、或は北滿に出征されし者約二百五十名。嚴寒の砌その御勞苦に感謝の敬意を表し度く、且つ御慰問にもと雜誌「日の出」十一月號(又は十二月號)を本會より送り、更に東京支部にても土屋支部長より慰問品を贈呈せらる。猶出征會員諸君よりも本會宛又は東京支部宛に多數の通信あり。就中第五回野口茂樹君よりは屢々陣中の餘暇に物されたる甚だ興味深き陣中通信、彼地の新聞、ガス、水などの寄贈あり。

○東京支部木内先生には相變らず御元氣にて、海外在留者子弟の御教育に御盡瘁。一方、毎月、木内學園内に時事研究俱樂部の例會を御開催。「木内學園」より「毎月御寄贈を受く。

○總會記事に御承知の如く、本年度「會報」は、御移動の通知に接した會員諸君に限り之を掲載、幾分にては紙數を減じ、以て國策に添はん事を期す。何卒御了承を請ふ。

會計報告

會計報告

(自昭和十二年十一月一日起至昭和十三年十月三十一日)

收入の部

- 前年度繰越金 四二七・八九
- 卒業生會費 五三七・〇〇
- 四年修了者會費 六〇〇・〇〇
- 浦和信用組合定期預金利子 五五・五〇
- 浦和信用組合當座預金利子 六・九九

合計

一〇八七・三八

支出の部

- 總會費 三〇〇
- 會報作製費 三六一・二九
- 會報發送封筒代 二一〇・〇〇
- 會報發送費 一五六・〇〇
- 通信費 三八・五七
- 弔慰金 三五・〇〇

合計

別に浦和信用組合定期預金 一五〇〇・〇〇

合計

八〇〇

櫻井先生遺兒教育資金現況

- 使丁退職金 八〇〇
- 事務費 七八・七〇
- 小使年末手當 一五〇・〇〇
- 雜費 四二・六三
- 出征會員慰問費 八三・二〇
- 來年度繰越金 二四四・九九

新校舍諸設備資金御寄附決算報告

收入の部

- 昭和十二年二月末現在御寄附金總額 七〇八三・三五
- 昭和十二年三月一日同十三年一月末ニ至ル御寄附金總額 四〇八・〇〇

會計報告

會計報告

二六

一二五・八二
九三・三七
七七・〇五四

支出の部

昭和九年十一月二十二日ヨリ同十二年九月末ニ至ル信用組合特別貯金利子
昭和九年十一月十四日ヨリ同十二年三月末ニ至ル振替貯金利子

四五三・四七
八〇・四二
一五・三三
四四・一八
一六・〇〇
四・九一

内譯

計 五三三・八九

差引 殘高

七一七・六五

昭和十二年二月末現在支出高
昭和十二年三月ヨリ同十三年一月末ニ至ル支出高
集束手數料
通信費
事務費
雜費

陣中だより

謹んで御慰問を拜受深謝仕候

松坂屋に御下命十二月二日付御差出しの御慰問品恰も駐留警備中の昨八日陸軍始觀兵式後思ひがけなく拜受したる歡び、解く紐の前後も知らず紙函押し開き日の丸の慰問袋より手當り次第取出し候品々先づ 武運長久、麗和會、同窓會の一葉、ついで

1. 罐入 煉 羊 羹 一
2. 同 ゆで あづき 一
3. 紙製角箱入 氷砂糖 一
4. 下 帶 一
5. 別染 戰捷御手拭 一
6. 武運長久慰問さくら紙 一
7. 同 じ家の陸軍納の「落し紙」とは書いてなす？
大體甘黨萬歳と思へば最後に眞赤なとうがらしは如何？
8. 防寒用とうがらし

あとは袋を倒にして色々の粉と香を嗅ぐ但し縫目を解けば袋は立派な手拭、店頭の正月景品にまさる數々御慰問を辱うしたる今日今更申譯も及ばぬ儀に候へども聊か實情を述べて御諒願上候

兵はみなわが子と見ゆる隊長のをぢも今年は五十一ぞや

たゞ陣中の習ひ兵と共に起き臥し共に走り共に食ひ時に共に圍廁に肩を並べ幸ひ應召以來病氣も知らず一意奉公罷在候乍憚御安意願上候老朽禁物の浦中の事故筆先だけなりと若やいと思ひ候へ共三朝に忠動を抽んで、既に定命を超ゆる身は「時代が違ふ」の鐵壁に遮へられてわづかに

カモシカの毛皮に似たるわが髪や禿とこれとは眞似は出来まじ

など兵には瘦我慢も申し候へども陣中萬事若き日の戀しさばかりに候

先づ上海上陸より迂路惡路雨中の泥濘道なき田の畔南京で江を渡つて死するまで悉くこれ七十五糧の一きさみ、況んやコンバスの大小が頗る物をいふ此際に於てをや、さては十二月一日五十の誕生日に江陰攻撃、田圃の中の軍工路前進に左右兩側眞横よりする敵機關銃の彈丸の雨を潜つて三、四千米、所命の西關外に達するまで猛射を浴びる幾百米、本部、中隊を率ゐる大隊長代理の駈歩、浦中運動會職員競走どころのさわぎに非ず、一發よく中れば靖國神社へ直行の此土壇場息をも切らし汗も流れ候儻倅にも部下一名の積る、なく當面の任務を果し翌日他方入城の間に北關鍾山の要點を占領茲に江陰攻略を完了いたし候

つゞいて同月十四日南京攻略同十七日眞に小春の好日和皇軍全市を埋め、難民、老幼あちこちに眼をそばだつる間に畏けれども幾年來拜しまゐらせたる、軍司令官宮殿下を敵國首都の中心に迎へ奉りて皇國千古の盛事八紘一字の一具現南京入城に参加したるはまことに千載の一遇一身の光榮我徒國體主義者

の満足感激只涙に候ひき

満天星光道尙暗。一發觸雷人馬顛。殘敵掃蕩豈瑣事。南京城外未明天。

十四日(舊十二日)午前五時出發、攻幕府山砲臺、後尾ヨリ見ル火光ト轟音、即チ兵ト牛ト支人夫ト同時ニ仆ル

御叱正を得ば一紀念に候南京最後の支軍十萬、八萬を屠り、二萬は逃走、聯隊獨力約二萬を片つけ中候當り來て聯隊六百七十九獵位の慰靈祭を行ひ、元旦旭光を迎へて皇居を遙拜す、昨日までの陰雲跡なく眞に麗かなる日本晴

もろこしの山河も今日は日本晴

「天業恢弘ノ元旦」ト拜し候

通信は當地に到つて初めて内地の第二便を授受いたしたる次第に候小包等は七十日を要したるものも有之當方よりの御無沙汰は一々御詫のいとまも無く失禮を續け居り候今回拜受の品は三十五、六日は割合速達の方に候當隊駐留茲に約二旬遠からず四百餘州の旅に出づるやも知れず候細報の自由を得ず物足らぬ所は軍國のため我慢下されたく候イツカ、ラデオで放送の平林○砲隊長は當中隊唯一の好○隊長に候先は御禮まで、卒業生白井政之助君の奮闘戦死を紙上に見る哀悼に堪へず候

謹啓新年早々御慰問狀並に御惠送の品々誠に難有拜受仕り候若き勇士に美人の清き心を籠めたる慰問袋は各所多々有之候へども三千の心一つにとぞ籠めたる御慰問は百萬の將士の中にも受くる人多からぬこと、存候深く感銘拜受仕り候次第に御座候

駐留二十餘日爲すこともなく近日軍に於て軍歌募集の要あり戯作一篇御笑覽に供し候近況の一端御高

祭願上候でも木炭は手製夜は燈火管制の日常に候右御禮まで
十月十四日夜十二時

拜具

三〇

上海派遣軍の歌 (第一三三三)

齋藤稿 於南京西郷

(使 命)

- 一、昭和十二の夏半
暴支膺懲の戎執りぬ
 - 二、Sya征け奮へつはものよ
四億の民を覺すべく
 - 三、禹域の咽喉扼すべし
海陸無比の協同や
 - 四、防備多年に壘堅し
背後の手段術つきて
 - 五、懸軍長驅獅子奮迅
首都南京を屠りては
 - 六、あゝ伏し仰げ國民よ
- 天の怒りに皇軍は
人類の仇滅すべし
東亞の闇を破るべく
聖戦の幕開かれぬ
- 長江の敵攘ふべし
終に陥る上海市
皇軍更に意氣高し
我が手に落つる上海市
- 師走半の十四日
江水凱歌に波躍る
金枝玉葉の畏さを

- 七、鐵蹄軽く南京や
仰ぐ將士の玉の露
- 御稜威稱ふる一すぢの

(結)

- 八、いざや讀へん諸共に
我が開闢の初より
- 九、仰げ神武の大帝
都一つと定めたる
- 一〇、明治昭和の聖代にして
Sya起て祝へ皇國人

(イ) 國つのり 國體 積慶。重暉。養正

(ロ) 都一つ、平和、神武ノ聖語、六合一都、八紘一字、絕對平和

特別會員 齋藤二郎

拜啓春暖の候と相成り候校長先生以下各位に於かせられては益々御健康に亘らせられ候事と存候降て
小官事久しく江南地に於て警備勤務に服し居候ひしが當地は他隊に引繼ぎて去る二月二十一日大連を經
て目下北支の〇〇地に於て匪賊の討伐に従事有罷候幸無事御安心被下候當地方の狀況を二三拾つて申上
べく候北支も廣いから一概には申す能はざるも當地の溫度は東京附近より少し寒い位に候従つて冬で

三一

も暮らし良い上海や南京と違ひ「クリーク」は殆んど稀なるも土民の警戒は一層嚴重にして少なる村と雖も土壘を以て四方を圍み家を圍み村や市街は有効なる防禦地帯に有之候家の周圍の土塀は高さ六尺以上厚さ一尺以上にして小銃弾は貫徹せず然して所々銃眼を設けあり候次に匪賊は鐵道沿線並軍隊所在地には居らざるも其他は大小無數にして大は立派の軍隊組織三千名以上も一團となり居り候小は四五十、大砲機關銃自動車等を裝備致し居候戦闘動作は中々上手で小なる部隊なれば四方より包圍して然も非常に強くなり大きな討伐に逢へば逃足は早い四散して便衣する最近の討伐時には二十貫匁以上の地雷を地下に埋めありしものを發見持ち歸り候

近く大討伐を行ふ豫定なるも敵の退路を遮斷する家宅搜索をする兵器を分捕る等をして段々匪賊を掃滅する様に致し居候北支地方は村落には木が多いので一寸遠くから見ても中はわからない討伐も困難の所有之候物資は綿小麦等は澤山出來る羊毛も相當に有之候高粱の如きも豊富に有之候然し當地方は田は無之従つて畑作が多く有之候土民は良く働く然し只今は未だ落ち付いて居らない所も數々有之候匪賊の居らざる所は安心して職業に従事致し居候北支新政權の指導の下に逐時統一されるものと存候時局重大にして前途遼遠國民舉つて國難を克服するに在り決して軍事的占領のみを以て終局を告ぐるものに非ず治安の工作は重要なものに有之候我々は一方威壓すると共に一方情實を以て服従すべきを示し一方文明國の意氣を示す等鬼になり佛になりて支那人を指導致し居候然し大部分は軍隊の威力を以て鎮壓の外無之候逐々暑さも相増し候折柄校長先生始め各位に於かせられては御體御大切に邦家の爲め益々御奮勵あらん事を北支より御祈り申上候 早々

三月三十一日

特別會員 内 田 義 春

拜啓其後は御無音に打ち過ぎ誠に御申譯もなく奉謝候、扱て早くも江北秋更けて雁聲高く向寒の砌益々御清榮の段奉恭賀候迂生以御蔭渡支以來思ひの外健康を維持し居り候に付ては驀馬に鞭打ちつ、軍務に服し居り候間何卒御放慮の程願上候、何分保管馬を有せざる部隊に配屬せられ一人一役にて固より暮に及ぶも仕事に追はれ勝に有之漸く自室に歸へりて先づ一喫すると午後九時過ぎに有之夫れより三種の書類を整理すると十一時となり時には「ア、疲れた」と思ふことなきにしもあらざるも所謂最後の御奉公に有之死向は辭せざるの決心に有之候間此の上とも御高擧御鞭打なし下され度希望此事に有之候何にしても第一線の方々には比べると全く樂な服務にて可有之且つ軍隊よりの給與は豊富にて被服飲食物は勿論娛樂用としては種々なる雜誌も配布せられ居り候、御惠送を蒙り候再度の諸雜誌に就ては誠に御芳志辱く奉謝居も前述の次第に付此の後は御慮外なし下され度偏に御願ひ申上候

十三年十一月二十一日

第一回卒業生 松 永 信 敬

前略今般南京攻略後に於ける軍の新配備及新企圖に基き衣糧廠の配置及職員の命課に異動あり私は○支廠長として赴任する事と相成候後任は目下無錫に在る佐藤(正次)大尉にして今明日中に上海着任の筈に付引繼の上一月二、三日中に出發の豫定に候

鎮江は南京より揚子江下流(陸路約十八里)にして南西の兩驛あり南驛は蘇州を経て上海、杭州方面に西驛は南京蕪湖方面に通ず、南京を控へたる主要貿易地にして平時人口約八十萬、今回の事變にては江陰(鎮江より揚子江下流)同様皇軍の正面攻撃を受けず包圍陣形により自然陥落したる所なるを以て市街建築物等餘り破壊され居らず現に電燈あり水道(?)もあり又山水の美に富むと云ふ

〇〇支廠は〇〇、〇〇、〇〇、〇〇の四出張所を有し將校の數も〇〇の二名に比し一躍五名に増加致候其他市街の狀況等は何れ着任後閑を得て御通知可致候。上海とは毎日便あるに付御手紙等從來通り（上海、大阪商船會社内崎氏氣付）に願上候

右取急ぎ草々

草々

尙去る二十七、八日待望の蘇州に遊び楓橋寒山寺虎邱山等を訪ね候へ共夫等の事も追て可申上候（除夜の鐘を寒山寺より放送する趣の處私は一足御先にゴンと撞く、鐘聲ゴワンゴワンゴワン。附近客船なく夕鳥只切りなり）

昭和十二年十二月三十一日

謹啓小生最近の行動概況左の通り御通知申上候

- 一、去月五日尙武の佳辰に武者振ひて徐州會戦に参加すべく勇躍南京より蚌埠に前進、黃塵と汗とにまみれつゝ活動中の處徐州も既に陥落し此方面の重大戦局は概ね片付きたるに付某中尉に後を譲り五月三十一日飛行機に依り急遽一旦南京に歸着、數日を更に新たななる方面へ進出の準備に過し候
- 二、安慶作戦の先驅として六月五日又々飛行機（南京より直航すべく小生の爲め特別仕立のもの）に依り單身廬州に轉進、毎日支那米と支那味噌、支那醬油に目をつむりつゝすゝり込む始末、大好物の酒も一滴の支那酒にすら恵まれず全く去勢されたる如き辛酸をなめつゝ徒歩雨中難路行軍に依り數日遅れて到着せる部下將兵（和縣より巢縣を経て廬州まで八日を要したり）と共に死闘を續くること十日

三、六月十五日午後兵一名を連れ僅か二十噸の北洋漁船に依り肥水を下り同夜巢湖上に假泊、十六日未明出帆夕方巢縣著一泊、十七日運漕河を下り揚子江に出て夕方蕪湖に至り同地支廠に在る同期佐藤正次君と快談、寢臺を並べて眠る、昨十八日汽車にて蕪湖より南京に一時落付き候、是より更に續いて安慶に挺進すべく各種連絡及續いて廬州方面より引揚げ來る部下と揚子江遡行の船とを待つゝの爲にて候、されば船の都合つき次第數日の内に出發可致然る上は又々當分御無沙汰申上ぐるやと存候茲に寸暇を以て 以上早々頓首

昭和十三年六月十九日

追白、六月十六日拂曉洗面うがひの折誤て上前の入齒を巢湖に吐き落し金其物の惜しきもさる事乍ら第一不自由で成らず目下大馬力にて急造中に候呵々とも笑はれず、巢湖に金牙を吞まると題して物せんど考へしも湖庭深くして名句も浮ばず候其の代り肥水下りの船中の腰折れ數首を左に

六月十五日肥水を下る

取り入るゝ人もなげなり川べりに眞白き布のたゞさらされて
枝垂れたる柳の糸も重たかり肥水の夏の風もなけれは
村をさとおぼしき家は大きにて日の丸高く水に映えたり
川べりに日の丸立てゝわらんべは我が船迎へ我が船送る
行くまゝに田畑こやすと名付けけん肥水のあたり今は荒れたり

巢湖近く風出で大なる帆をはらんで上り行くに會す

大なる帆足は強しすめ國のつはものあまた肥水を上る

拜啓其後ほとんど御無沙汰に打過ぎ誠に缺禮致しましたが御變りもなく御健勝の御事と御悦び申上げます

扱前回(六月十九日)一時待機中の南京から御便り致しました後の私の行動概略を左に御通知申上げて御無沙汰の御詫に代へる事と致します

六月二十二日 南京出發揚子江を遡り同二十五日安慶著

此の船中の作「君を思ふ心亂れつうつ」とも夢ともわかず船路をぞ行く「君とは誰かあらん、前便廬州以來私の任務の的たる〇〇部隊に外ならず、陸路南下する其の部隊を早く安慶にい行きて迎へんものとの私の衷情を詠んだものです

九月一日迄約七十日間安慶に駐留

此の間は丁度眞夏の事とて新聞紙上御承知の通り百度内外の暑さは普通と云ふ状態ではれには相當惱まされました天に雨なく地は黄塵に泣く、夏草も萎えて生色ありません。七月末、或る日の眞晝時あのよらかな美しくいお羽黒蜻蛉が日に焼きつく家の軒下を喘ぎ乍ら飛び交ふ状を見ては「お羽黒よ汝や故里の茶ばたけの日かげ陸みつ飛びしとんばか」とか弱き虫に寄せて思はずも暫し望郷懐古の情に打たれました

同日飛行機にて安慶出發九江を経て同三日黄梅著

十月五日迄三十三日間黄梅駐留

九月中頃急に冷氣を覺え秋風の身に沁むを感じまして次の一詩を賦す

征戰歳餘西又東

皇師幾回度長江

俄聽秋風黃梅夕

落日彼方望漢口

漢口は黄梅の西方直距離約三十六里に當ります

第五回卒業生

野

口

茂樹

拜啓時下晩秋の候各位には益々御清適の段奉賀候久しく御沙汰仕り恐縮に存じ居候處本日は御心に懸けられ雜誌「婦人公論」八月號同「日の出」十一月號各登册、十一月一日東京日日新聞一、御送り被下御懇情難有感謝に不堪候小生目下北支に罷在候へ共御蔭を以て無事軍務に精進致し居候間乍他事御安心被下度候乍末尾御一同様の御健勝と御校の御隆昌とを御祈申上候右御厚禮申上度如斯に候 敬具

第十一回卒業生

吉

野

松五郎

拜啓昨夏暴支膺懲の聖戰に出征以來絶大なる御後援を賜り且つ戦傷後は御懇篤なる御慰問に預り難有奉深謝候

日頃の御高恩に報ゆべく決死奉公の覺悟を以て出征致候處上陸後間もなく未ださしたる戦功も立てざる内に十月十日〇〇の夜襲決行の際戦傷し内地歸還を命ぜられたるは遺憾に堪えざる處に御座候然も多數忠勇なる部下將士を失ひ誠に申譯無之心痛致居候

戦傷後數ヶ月の間不自由なる病床生活を續けたる爲遂々御無音に打ち過候段何卒御容謝被下度候御蔭

を以て其の後の経過良好にて今は殆むと全快去る四月八日より表記伊東温泉にて療養罷り在り不日全快致すべく候間御安神被下度願上候

先は御無音を謝し御禮旁々近況御通知まで 敬具

昭和十三年四月十五日

第十二回卒業生 吉 澤 照 次

謹啓時下嚴寒の初同窓會各位益々御清榮の段奉賀候

先般は御懇篤なる御慰問状及び結構なる御慰問品を上海の某地に於て頂戴仕り有難く厚く御禮申上候小生御蔭様にて上陸以來微傷だに負はず日々軍務に勉勵致し居り候間御安心下され度候、何れ命ありて凱旋の曉には母校を訪問當地の模様等申上ぐる機會も有之べしと存じ候、先は御禮まで 匆々

二月二日

第十四回卒業生 山 口 甲 子 男

拜啓本日は懐かしき母校同窓會よりの心盡しの御慰問の品々御送附下され誠に難有厚く御禮申上候、不肖今回の事變に際し應召の光榮に浴し北支方面に轉戦を重ねること茲に半歳時には死線を越えたる事あり時には心より萬歳を叫びたる事あり御蔭様にて身に一寸の傷も負はず健在に有之候銚後皆様の御期待に沿ひ奉る様一層の努力仕るべく不敢取以寸書御禮申上候遙に同窓會の發展を祈上候、草々

第十五回卒業生 名 古 屋 喜 代 造

皇威東亞を蔽ひ稜威八紘に治き戰勝の初春、征衣を間外に纏ひつゝ遙かに東天を拜し感慨轉た無量

日の本やよくぞ男の子に生れたる

皇國のありがたさをつぶさに體驗仕り候偏に御健勝を祈り上げ奉り候 敬白

戊寅の初春

第二十二回卒業生 齋 藤 忠 康

拜復本日御丁寧なる御慰問の言葉を賜り且御心盡しの品々まで澤山御惠送に預り誠に難有感銘罷在り候

昨年九月渡支早々吳淞クリク戰鬪に参加以來大場、江灣、上海、南翔、嘉定に連戦去月以來轉じて杭州攻略に参加仕り百五十里行軍杭州入城一月元旦を迎へ本月二十一日出發以來四十二日振りにて舊地上海郊外復且大學に歸還仕り御芳書並に御慰問品を拜受仕り候次第に候御禮狀遅延の段右の如き次第につき御諒承被下度候

承り候へば母校新校舎も目出度落成致し皆々様の御後援に依り益々御隆盛の由誠に御同慶に不堪遙に謹而感謝の意を表する次第に御座候 不肖御蔭様にて彈丸の下に轉戦寧日之無きにも拘らず元氣旺盛益々各位の御期待に添ひ奉るべく盡忠報國一層奮勵努力致す覺悟に御座候

茲に謹而麗和會同窓會各位に對し滿腔の感謝の意を表し度く如斯に御座候 敬具

一月二十二日

第二十二回卒業生 金 子 揆 一

先生には其の後彌々御健勝之段奉賀候

今度は態々御鄭重なる御慰問を賜り有難く御禮申上候幸ひ小生事無事連日の戰鬪に従事致し居り候へ

ば乍他事御休心願上候尙先般は同窓會より結構なる慰問袋を頂戴致し誠に感謝に堪へざる次第に有之候會長殿へよろしく願上候

二月二十五日

第二十三回卒業生 伊藤 泰介

御親切に慰問品御送付下さいまして有難く頂戴いたしました杭州攻略に従事し往復百数十里の大行軍を了し再び歸還しました小生頗る元氣です同窓會からどんな顔振れが出征してゐるか知り度く思つてゐます出来ましたら名前と部隊名謄寫刷でいたゞけたら有難いと思ひますが

一月三十日

第二十三回卒業生 小泉 勝治

謹啓賀状有難く頂戴仕り候昭和十三年の新春を迎ふると共に愈々御機嫌御麗はしくわたらせられ慶賀至極の御事と奉存候卒業以來絶えて久しく御無沙汰に打過ぎ恐縮至極に奉存候下而小生事御蔭様にて出征以來無事軍務に罷在こゝに意義深き新年を陣中に於て迎へ元氣旺盛皇國の爲め一層忠勤を盡す覺悟に御座候間乍憚御安心下され度候目下小生の任務は患者輸送にて文字通り東奔西走一日として席の温る事なく上海、金山、平望鎮、嘉興、杭州等を往來致し居候而して杭州滞在中先輩篠田省三大尉の戦死を拜聞致し衷心より哀悼の意を表したる次第に御座候かゝる貴き犠牲者は我々が任務遂行中毎日耳に致す事に御座候新春とは申しながら未だ寒氣厳しき折柄一層御自愛專一に遊ばされ度願上候乍末筆校長先生を始め校友諸先生、生徒諸君へも呉々もよろしく御傳言下され度候先は御機嫌伺ひ旁々近況御報告まで如斯御座候 敬具

第二十四回卒業生 大島 圭 宇

謹賀新春 度々御書面有難く拜讀致しました御無音に打ち過ぎました事をお詫び申します亦去る一月二十六日には結構な御慰問品御惠送下さいまして誠に有難う御座いました厚く御禮申上げます去る十二月九日上海を出發杭州攻撃に向ひ漸く任務完了し一月二十六日歸還致しました行程百数十里將兵一同益々元氣にて只今待機中でありまず先は御禮旁御通知迄 草々

第二十四回卒業生 野本 正 雄

拜啓先生何時も御無沙汰ばかり致して居ります。内地もめつきり御寒くなつたでせうが益々御精武の御事と御喜び申上ます

先日は結構な御慰問の品を頂戴致し有難うございました早速御禮申上げなければと思ひ乍らつひ〜遅れました御詫び致します

御高書の浦中の寫眞實に立派なものですねでも私達には鹿島臺の古い校舎が懐しいです。雑誌は私の讀んだ後兵が引張りついで讀んで居ります

滿洲も零下十七度内外の寒さになりましたが有難い皇恩と皆様の暖い御心盡して何一つ不便もなく又寒さも内地より凌ぎ易く心ゆく迄で御奉公が出来ます

任地の狀況は諸種の都合で詳しく御話し出来ませんが日支事變や張鼓峯事件にもソ軍の側背よりする越境に或は飛行機の飛來等の妨害を完全に封じ込めて近い將來の重大事局に善處し活躍すべく努力致し

此の度は懐しき御便り拜謝仕り候既に上陸以來七十餘日此の間數次の戦闘に参加致し候も武運拙く一片の武勳も無之皆様方の御盛援に對し奉り慚愧至極に存居候數日前より我々は〇〇附近の警備に就き一同残念至極に存じ居り候、幸ひ身體至極壯健益々奮勵以て自己の任務を完全に達成致すべく茲に御約束申上候、先は御禮まで 敬具

第二十九回卒業生 金子 賀 雄

五寒凛烈の候皆様には相變らず御壯健に御活躍の事と遙かに遠察して居ります生憎行動中の事とて受領の機が遅れましたが十一月廿九日御發送の御慰問品一月十五日難有拜受いたしました厚く御禮申上げます

思へば吳淞クリク兩岸地區に展開された激戦以來敵は堅固な防禦線を惜し氣もなく次々と抛擲し茲に陣地攻撃戦は追撃戦へと轉進し皇軍の進む所到處に輝く日章旗は翻騰と力強く翻き感激の場面は隨所に展開されました主なる占領地區には既に次々と治安維持會が憲兵隊の援助に依り結成せられ復興の氣運勃々たるものがあります北に南京の心臓を刺し南に杭州の壯麗な構成美を眺め戦鬪一段落の觀があります素より複雑微妙な本事變の事とて〇團は目下第二、第三段階の戦鬪に備へて上海附近に集結一意戦力の充實に邁進して居ります

僕は九月廿六日上海税關第二棧橋に上陸以來今日迄元氣一杯飛び廻つて來ましたが此間〇團に追隨し或は〇團を離れて重藤〇隊に隸屬し北は無錫南は杭州に迄轉戦いたしました世紀の勝利を齎した南京攻略には残念ながら〇團は参加しませんでしたけれども主なる戦鬪地區には殆んど足跡を印して参りました

した

目下江灣復旦大學にあつて待機の姿勢にあります相變らず元氣に任務に邁進して居りますから御休

心下さす

同窓生も大部當地戦線に加里居り殊の外力強く思つて居ります

酷寒の折柄皆様の御健康を遙かに御祈り致します 先は御禮迄

一月十五日

第二十九回卒業生 渡 邊 英 敏

拜啓時下嚴寒の候には御座候へど會員諸兄には御機嫌置はしく新春を御迎へ遊ばされたること、遙かに衷心より御祝辭申上げ候

扱て只今は十二月二十六日御發送の同窓會、麗和會よりの小生宛慰問袋を思ひがけなく頂戴致し感謝の至りに存じ候

御心を込められたる品々誠に有難く中支の戦地より遙かに厚く御禮申上げ候、今後は増々奮闘致し祖國日本の皆様方の御期待に副ふべく覺悟致し居り候、次に小生出征以後の様子を極く簡単に御報告申上げ御参考に供し度く存じ候

十月十五日〇〇聯隊入隊、二十九日に〇〇港出帆、杭州灣敵前上陸部隊に編入され勇躍母國を去り候へど上陸に豫期以上の好成绩を収めたる爲か小生等の軍用船は吳淞沖に廻航され十一月二十四日上海に上陸を爲すことを得永き船中生活を経たる事とて戦友一同の喜びたとへ様も無之候

上陸後直に行軍に移り激戦の跡、北四川路、大場鎮等を通過、主として學校などに宿泊しつゝ、松江、

金山、嘉善、嘉興を経て北上し平望鎮を通過、約七十里の行軍を終り十二月七日、太湖の南、湖州に到着致し候、行軍中は第二線部隊攻撃直後の事として沿道には數知れぬ人(支那人)馬の死體横はり臭氣鼻を突きその慘狀は想像以上に有之候、夜行軍を致せし時などは死體を踏み踏きさうになること度々にして如何に支那兵の死體の多きかを御想像下され度候、夜は土間の上に藁を並べて外套を着たまゝゴロリと横になるのみ、然し戦友一同の心はたゞ前線へ一日も早く着き第一線部隊の給與を爲さんと一同張り居り候、十二月一日には強夜行軍をなし飯を炊く時間なく畑の芋を嚼りつゝ進軍致し候、湖州到着後は食料の徴發(之は支那民家に到り食物を強制的に持ち歸り軍票を渡してやる)第一線部隊の給與等に終日働き約一ヶ月を経過し去る一月六日當地、嘉興に到着、杭州方面部隊の給與、治安維持の軍務に終り居り候

湖州は宋美齡の生地にして景色非常に良く中央を流れて居るクリクの水も一入町の美觀を引立て居り候、然し十五萬からあつた人口は殆んど避難し美しくあつたクリクには今は死體、此處、彼處に浮び我々は其水を以て炊事を致し居り生ける哲學を體得致し候、當嘉興は蒋介石の生地とか云はれ民家は大部分焼かれて居るか、壊されて居り候へど戦鬪も目下待機の姿にて、ポツ／＼と住民は日の丸の旗を手に歸り來り治安も全く維持され居り候、御知らせ致し度き事多々あれど軍務多忙の爲以上の御報告にて筆を止め申し候、先づは御禮旁々近況御知らせ申上げ候、末筆ながら遙かに會員諸兄の御健康を御祈り申上げ候 敬具

一月十九日

第二十九回卒業生

所

春

雄

拜啓時下寒冷の候となりましたが母校にはその後益々發展の由遙か遠き北支の空よりその隆盛を祈ります。先日遙に慰問の雜誌及び御葉書をいたゞき厚く感謝してをります。實は小生本年七月六日召集の榮に接し七月十九日品川出發勇躍出征の途に就きました。七月廿六日北支〇〇港に上陸後直ちに當地徐州に参りました。爾來約四ヶ月幸に相變らず元氣に勤務してをります。その間一度柘城の方に進出しましたが十月初より再び當地に落付いて業務に従事してをります。

病院はもと中學校の跡だそうですが設備が悪いので内地の比ではありませんが修理してどうやら立派になりました。只今外科診療主任として戦傷患者の治療に従事してをります。中々多忙で朝から夜迄仕事に忙殺されております。當地も昨今はすつかり復興して大抵のものは間に合ふ程になり大した不自由もありません。氣候も内地と大差なく只雨が降らないので乾燥してをります。物價は内地より二、三割高い位で日本品も多くなりました。電燈新聞雜誌も手に入るやうになりました。時下益々向寒の折から皆さんの御健康と母校の發展を祈ります。土肥、土橋、井上、福宿先生方に宜敷く願います。

第二十九回卒業生

加

藤

騰

藏

御葉書有難う存じました。筆不精を多忙にかこつけて御見送りの御禮も申述べず失禮仕り候した。元氣で南京入城後只今湖州に滞在して居ります。實に多忙な日を過して参りましたが近頃漸く暇を持てる様になりました。一昨日父が同窓會名簿を送つて呉れましたが戦死者が殆ど知つてゐる人達ばかりなのに一驚しました。同級から二名も殊に櫻井君までやられてゐるには呆然としました。千葉君も白井君も元氣者だつたから随分奮闘した事だらうと想像出来ます。

過日は同窓會から慰問狀を頂いて未だこれにも御禮狀も出して居りませんし今井先生にもあなたにも一切御挨拶してありませんが私が極めて頑健で沃丁を塗りまくつてゐる事を何卒御鳳聲下さいませ。上海で陸戦隊本部を訪ね今井守之君に會ひに行きましたが(十二月三日頃)かけ違つて駄目でした。轉任された由でした。

新校舎に移り何かと御多忙の事と存じます切角御自愛の程祈上げます裕の事何分宜しく御願ひします

一月十四日

第三十回卒業生 高 田 進

土肥先生はじめ母校の御皆々様御機嫌如何にわたらせられますか謹んでお伺ひ申上ます。

過ぎし日故郷驛頭に、久振りにお目通り、同時にお別れいたしましたから、月日は夢のやうにすぎたゆきました。私も一人前の日本男子として、國防の重き責任を分擔一家の名譽之にすぐるものほごさいません。皆様の御熱誠溢る、御聲援によりまして、内地に於ける教育も終はり八月末大命を拜しまして一同勇躍九月三日〇〇出帆、北支〇〇河口に上陸、津浦線にて皇軍躍進の跡を南下、水一斗泥六升といはれる黄濁の大河をひとまたぎ、かくて征途恙なく徐州に到着いたしました。そして息つく間もなく出動、月餘にわたつて討匪戦に参加いたしました。奴等は中々組織的でその數も幾萬と稱せられ、そちこちに根據を構へ暴行掠奪を擅にしてゐます。奴等は又便衣なので、良民との區別がむづかしく、ために大きな苦心と犠牲が拂はれてゐます。私も幸ひ元氣にて日々勤務について居ります故他事ながら御放念下さす。

本日は又御丁寧なお葉書と共に、結構な雑誌たまはりましたことに有難ふございました引張りだにて一

同非常によるこんで居ります。幾重にもお禮申上ます。

此地方は只今ドライシーズンにて毎日晴天つゞきです。雜木は葉がスツカリ落ちて、北風が黄土の粉をまくしたて、ビューと吹きすさんでゐます。見渡す限りの曠野は、きれいに耕されて緑の麥の芽が三四寸すばらしい生活力を盛上げてゐます。冬ごもりの準備にか餌をさがす野兎の姿も寒そうです。私どもも炭焼きにせわじうございます。内地ではもう迎春のプランに頭をなやまして居られることせう。皆様お揃でよい年をお迎へ下さい。では今日は之にて、さようなら。

十三年十一月二十四日

第三十回卒業生 中 村 正 節

先日はくさぐさの慰問品有難うございました。警備から歸ると、「石田小包を取りに來い。」と〇隊當番殿の達しに大いそぎに事務室へかけて行く。松屋の商票に誰からと思つて開けて見る、三一會だ。陣中ハガキ、夏シャツ、好物のミツマメ、アツキ、色々の品々、應召出發に際しては何しろ京都にはなれてゐるので中學へもお伺ひ出來ず全く御無沙汰してゐたにお忘れなく心盡しの慰問、感謝いたします。小生三月十九日渡支、北京附近〇〇師跡にて訓練を受け、四月上旬突然保定に移り今に至るまで警備に、討伐に日夜奮闘してゐます。御承知の保定は京漢線に沿える北支有数の都會にて均しく高大な城壁にかこまれた典型的な城廓都市、こゝが陥ちたときには提灯行列を舉行して全國的に祝つた程の攻撃だつただけに街のあちこちには激戦の迹なまなまと我等の心をわかせるものがあります。既に一千二百の内地人の來る有り皇軍の確保するところではあるが四周に敵をひかへて嚴重な警備をしてゐます。浦中同窓生といつても下級生だが一級下の佐久間氏や並木氏等があるが中隊が別なため殆どあへなく聞

くところによれば佐久間は〇〇大攻撃に参加すべく先日出発しました。
先日内地から送られた新聞に、クラスメート千葉君の壯烈なる戦死について記事がのつてゐました。
小生に限らず同級生で大陸に来てゐるものも多々あること、存じますがお知らせ願へれば幸いです。右御
禮かたぐい近況おしらせいたします。

五月十七日

第三十一回卒業生 石 田 秀 文

謹啓陽春の候と相成御一同様には益々御勇健の御事と拜察仕り大慶の至りに存じます。

私儀出征以來懇篤なる御厚情を賜はり御芳志誠に有難く御禮申上ます。

上陸以來茲に半歳餘些か微力を以て無事今日迄暴支膺懲の大任を果しつゝありますのも是偏へに神明
の加護とは申せ皆様の蔭ながらの御援助の賜と重ねて御禮申上ます。何分にも平素は多忙勝なる戦線に
事よせ失禮無沙汰の段御寛容被下度御詫び申上ます。

扱て現状の一端を記せば部隊は既に御承知の如く各地に轉戦日章旗靡くところ赫々たる武勳を發揚し
引續く戦捷に去月十八日拂曉月明を浴びて崇明島敵前上陸を敢行致しました。流石抵抗線に眠る殘敵共
も果敢なる我が部隊の奇襲に狼狽多數の武器、彈藥を捨て、潰走遁入し部隊は更に之が追撃を續行數日
にして全島に亘り掃蕩制壓を完了二十七日より早くも自治委員會を組織せしめ全島明治安建設を見るに至
つたのであります。此の島は土地頗る肥沃にして氣候亦良く綿花、麥、大豆などを始め農産物が非常に
豊富であると云はれて居ます。昨今など氣候大變暖く田圃には麥やそら豆など青く菜種の花は満開に咲
きクリークに沿ふ楊柳も若芽萌え出て搖ぐさまなど一入南の國の風情を感ぜられます。

部隊は治安確保を得て目下現地を歸還し戦力を充實し次期作戦準備を以て待機中に在ります。今や皇
軍の戦果着々として到る處明明なる新機運の興隆を見るときは云へ事態は愈々長期抗戦に入り事變の前途
は尙未だ遼遠帝國の使命亦益々重大を加へつゝあります。銃後全國民を擧げて一體となり百難克服こそ
帝國の爲共に與へられた使命であり大アジア建設への黎明であると存じます。

冬來りなば春遠からず既に江南の天地にも春は訪れました。その後に来るものそれは輝かしい世紀の
黎明が大地の上に訪れて支那大陸の一角から新政權の旗の下皇軍の恩威に浴して新興支那が建設への巨
大な歩みを踏み出すこととあります。

新しい支那、それこそ支那四億の民衆が待ちに待つた解放されたる眞の姿であり東洋永遠の平和への
道標でもあります。

甚だ亂文ながら紙上を以て無沙汰御詫び旁々近況御報知まで 匆々敬具

四月十二日

第三十一回卒業生

友

光

恒

拜啓御無沙汰しましたが僕も益々元氣です。上陸以來今日迄の南支で焼けた髯の顔自慢ぢやないが見
せ度いな、〇〇上陸以來内地に於ては到底想像もつかぬ不自由さ勞苦さを味ひ乍らも、牛の如く働き馬
の如く喰ひ豚の如く肥え元氣愈々旺盛故何卒御休心下さい。此の邊の氣候は面白く畑に菜の花が咲いて
居ると思へば田には黄金色の稻が波打つて居り且つ鶯が鳴くかと思へば行々子が鳴くと云つた工合誠に
奇異の觀丁度内地の四季の景を一緒に見る様です。只今漸く〇〇大都會の近郊に落着きましたもの、多
忙の不自由さには變りなく未だ此の手紙を書くにも僅か一本のローソクを頼りに十數人の者が懸命に書

して有様です。いづれ又後文にて。サヨナラ

第三十一回卒業生 齋 藤 修

拜啓嚴寒の折柄益々御清祥の事と存上げます。

惜て本日は御送り下されし御心盡しの品々有難く頂戴し深く感謝いたしてをります。戦地の我々が銃後の皆様から賜る御後援に對し如何に強い感銘を抱き、更に勇奮を誓ふ事でありませう。我部隊は去る師走の九日〇〇を出發し連日行軍をつゞけ數十里を踏破し、××城攻略に参加し廿五日堂々入城いたしました。仰ぎ見る日章旗に祖國の感激を想起し、日本人たる強い自覺を持ち、意義ある新春を彼地で迎へました。去る九日思出を残し××を出發更に方向を變へて敗鼠の敵を殲滅すべく、泥濘と寒雨と闘ひ數十里の行軍をつゞけ無事任務を達成し、再び〇〇に昨日着いたところです。こゝで英氣を養ひ次の前進への準備をするつもりです。先は右御禮旁々近況御知らせ迄。

一月二十四日

第三十二回卒業生 關 根 健 次

拜啓愈々今年も押迫つて参りました。今井先生初め諸先生方には相變らずお元氣で居られる事と存じます。先月末に小生の〇隊は上海移動を命ぜられまして、今月早々〇〇に上陸致しました。列車(勿論貨車ですが)約二ヶ月の間汗を流した北支の風景に別れを惜しみ乍ら幾日も揺られて〇〇に集結しました。一晩日本人の家に分宿しましたが、七十幾日振りに入つた蒲團が素晴らしく柔く暖かつたです。街を見物に出たら急に東京を思ひ出しました。翌日乗船して海上平穩に吳淞沖に入り、先日上陸しました

上海はさすが暖く、道路も立派で自動車隊は全く助かります。外國租界の高い建築物が立並んで見えますが自分等は勿論行けません。爆撃された市街は丁度震災後の東京を思はせます。陸戦隊が厳しく固めて居ます。未だ日本租界には行きません。不自由な忙しい生活にももう馴れてしましました。幸ひ體具合がよく風邪一つ引かないので自分ながら自分の體を見直しました。所が先日からセツとかいふ腫物が體のアチ此方に出て些か痛いのです。軍醫殿に荒い所を一つお願ひしました。もう直ぐ癒るでせう。では又お便りします。

十二月十二日

第三十二回卒業生 千 田 恒 二 郎

母校麗和會同窓會諸兄

先日は諸兄の心からなる第一線將士への慰問袋を御配送被下平素御無沙汰勝なる私故何とも申譯なく有難く厚く御禮申上げます。私も御蔭様にて頗る元氣にて北滿の曠野に帝國の歩哨線を嚴守して居ります。帝國の勢は正に旭日昇天の如くあの慈愛の光を以て何物をも同化せざれば止まぬ一大躍進期に直面し私は今その一端を擔つて(何故なら帝國は精兵主義でありますので一人々々重要な戦闘役割を與へられて居ります)畏くも 陛下のもとに集ひ得て然もその發展の最先線に活躍出来るといふ事は男子として最も本懐でありますが然し小生不幸にして北方作戦とか齋々哈爾に派遣された事はかへすくも残念であります。

扱て現下の國際情勢は一時好轉するかの氣色を見せられたれど四圍の情勢漸く險惡となり殊に蘇聯邦は總選舉結果と凍結期たる彼等唯一の好期を握つて對支援助策も露骨となり漁業問題沿海州移民問題に益々

その度を加へ所謂滿蘇國境三方面は異常な緊張を示して居ります北南支の空氣はいつ旋風に席卷せられ當地方に落下するか神ならぬ身の豫斷を許されません。

我が北滿將士は時こそ來れと諸兄には想像難いと思はれます零下三十七度の極寒曠野に晝は〇〇攻撃夜は徒も鬚も氷垂にして猛演習寒いは通り越えて痛く更に無感覺になつてしまひます。明日にも知れぬ出動準備帝國を代表せる北滿關東武士の後裔たるまけじ魂は遺憾なく發揮されて居ります。

次に帝國に對する間諜網は眞に充實せられて居ります殊に第一線地に於ては劇烈であります故同方面の事に關しては之位で御許し下さい。

二十七日

第三十三回卒業生 石井 秀治

拜啓皇軍戰捷の目出度き新春に際し

校長先生初め諸先生には愈々御健勝のことゝ遠察申し上げます。降つて小生も毎日元氣にて及ばず乍ら國家のため御奉公申し上げて居ります故他事乍ら御休心被下度。出征以來早半歳、其の間幸はひ大過なく今日あるを得ました事は之一重に銃後の皆様方に依る熱誠なる御後援の賜に外ならぬものと深く感謝して居る次第で御座居ります。

扱て今又此所に母校同窓會の名をもちまして御丁寧なる慰問品に接しました事は重ね重ねの御厚志何とも御禮の申し上げやうもなく唯々感激の外は御座居ません。これに引代へ不肖私には未だ御報知申し上ぐべき程の手柄話もなく全く凡々として戦地に尊き一日を送つて居りますことを思ひ我身の不甲斐な

さをつくづく恥ぢ入るばかりで御座います。

今事變に際しては同窓會員としての先輩諸兄も澤山出征して居らるゝ由、夫々各地の戦線に於て目覚しき奮闘をして居らるゝ事と想像して居ります。又國を擧げての事變熱、銃後の活躍を如何に眞剣に爲されつゝあるかと云ふ事も時々送られる故郷の便りや新聞などに依つて聞き及んで居り、それ等の記事を見る度に益々覺悟を新にし、以て銃後の御期待に副ふべく奮闘する決心を深める次第であります。

事變の成行。國際狀勢の動向。總て樂觀を許さぬ状態にあります。樂觀どころか日々に悪化しつゝある事は毎日の新聞紙上やラヂオニュースの報導陣に依つても明瞭なことゝ思はれます。そんな譯で私達の任務も今後益々重大となる事と信じます。

而して私達戦線にあるものゝ凡ゆる困苦缺乏に耐へて如何なる難關も突破して最後の勝利に邁進して行く事が出来るか否かは一にかゝつて銃後の皆様の大なる御後援にかけられてあると思はれます。此處に於て今後共何分の御援助を心からお願ひしてやまないわけで御座居ります。私達は唯今〇河近く〇〇附近の一部落に滞在して居ります。寒さも峠を越しました。東洋一と言はれる〇河大鐵橋は敵の爲見る影もなく爆破されましたが今や着々として復舊されて居ります。〇〇の町も次第に恢復し土民も大半歸つて皇軍保護の許に嬉々として各々の業務について居り、五色旗の翻つて居るのも此所彼此に見受けられます。河北より山東へ聖戰幾月。今更過ぎし日の勞苦を思ひ浮べて轉た感慨に堪へません。

各地戦線の模様など却つて銃後の先生の方がよく御存知の事と思はれます。

従つて色々御報知申し上げたい事も御座います但し舊聞に屬する事と思はれます故中止して置きます。以上色々下らぬ事を申し上げましたが何卒足りぬ處は御賢察下され度此處に改めて御厚志の段厚く

御禮申し上げますと共に諸先生の益々御健在ならんことを申し添へて筆を擱きます。
蕪雜なる書き振り平に御容赦下され度御願ひ申し上げます。敬具

二月一日

第三十三回卒業生

近

藤

知

之

二伸 新築校舎落成を心から御祝ひ申し上げます。

戦地もめつきり寒くなりました。

内地は菊が美しく咲き亂れて居る頃でせうが、船に居ては只殺風景な○○の景色をはるかに望むばかりです。

先日「ソバ」の花が見えた時は皆ブリツヂに上つて眼鏡でながめたものです。支那でも「ソバ」を造る事は初めて知りました。

昨日同窓會御寄贈の雑誌を頂戴致しました。月に一回か半月に一回しか内地から便りが来ませんので郵便が来たと云ふと兵隊は皆大騒ぎです。漢口も落ち又岳州も一角占領のニュースがありました長沙衡陽も亦近い内です。

今私達の従事して居る仕事は申上げられませんが四周敗殘兵多く時々面白い場面に遭遇します。

十一月二十一日

第三十三回卒業生

桑

原

威

二

拜啓大分永らくの間御無音に打過ぎまして何時も乍ら陣中多忙で御赦し下さい。

校長先生始め兩先生益々御壯健にて御奮闘されて居る事と存じますが、何分只今梅雨時如何遊ばして

居りますや御伺ひ致します。

時折り送られて来る郷土の新聞に浦中魂を戦場で勇敢に發揮され護國の鬼と化せられる先輩を見る時は誇り度い氣持にかられますが、引きかへて自分達の特務兵なる事を想ふ時運命の皮肉に泣きます。偶然にも當隊には山本武夫、山口豊太郎、福島愿之助の諸先輩と小生とで四人居りますが、何れもまげずのどん栗連中惜しい事に阿武先生が居りません。確か先生も同類項だつた筈ですね。

尙皮肉なことに本庄中出身兒玉の某小學校訓導をされる廿六歳の久保少尉、不動岡中出身北埼玉の某小學校訓導をされてゐる小生と同年伍井少尉、下へも置かぬ○隊長殿、昔の殿様もかくありけんと思はれる程の……

特務一等兵の生等四人皆別々に仕事はして居りますが矛盾と不平を征服するにとつときの浦中魂を使つてゐます。即ち山本武夫なんて文士めいた名前の奴さんは此の手紙もさぞ檢閲されるでせうが、書翰の檢關係や戦時名簿なんて役場の戸籍係の様なものの中隊事務室でひねくり廻して居ます。これは詳しく書くことを許されませんので御想像に御まかせ致します。次に山口君は名班長代理でといつても星は同じ二つ、それに命令指揮權を持たずと條文に明記される特務一等兵殿で、只今我等を去る數里の處で警備旁々輸送の任を果たしてゐます。相不變御人好と世話好きで好評です。さて次の福島君は炭屋さんだけあつて何時も眞黒(日焼で)になつて馬力をやつてゐます。まあ彼氏が一番巡り合せが悪く途中脚氣にかゝつて最大の想出となるであらう○州攻略行軍にも参加が出来ずに殘留したのでした。それに警備勤務の萬全を期する爲に非常に勤務が多いので馬を持つ福島君は二日置き位に厩番、衛兵等と勤務してゐます。

拜啓此の度は御多忙中わざ／＼お手紙並びに慰問品をお送り下され誠に有難く厚く御禮申上ます。寒さ厳しき折柄皆様には益々元氣よくお活躍の由お喜び申し上げます。小生事お蔭様にて相變らず元氣にて當地上陸以來四ヶ月餘一意専心皇國の爲御奉公致し居ります故御安心下さい。

戦地の様子は新聞、ラヂオ等のニュースにてよく御存じの事と思ひます。益々努力致し皆々様の御期待に副ふ様大いに活躍する覺悟で居ります。當隊にも同窓生が數人居り時々會つては浦中の話をして居ります。

昨年拾月齋藤先生と偶然にも吳淞の永安紡績工場に宿泊した時お會ひ致しました。遠い戦地にて先生にお會ひ出来ようとは夢にも思ひませんでした。夢の様な氣持が致しました。實に嬉しかつたです。先生は非常に元氣にて直ぐ一線に向はれました。今はどの方面にてお活躍か其の後はお會ひ致しません。當地にも廿九日には雪が一寸積りました。内地も益々寒さ厳しき事せう皆々様自重自愛御身御大切に願致します。

二月十日

愈々暑さ厳しい折柄皆様お變りも御座いませんか。不肖私も至極元氣にて銃後の固い守りの中に安じて軍務に精勵し皆様の厚い御支援の下に國防の第一線に立つの幸福を心から舊く思つてゐます。事變勃發

以來既に一ヶ年身は北滿の僻地に在りて徐ろに過去を顧るとき炸裂する砲煙彈雨の中生々しき戰國の數々の腦裏をかすめ感慨無量なものがあります。支那の迷夢未だ醒めやらぬ今日帝國の使命未だ樂觀を許さず身はたとへ野邊の草露と果てようと悔ない命ではありませんが皆々様には益々御健かに愈々御多祥に銃後を御守り下さる様御祈りして止みません遙かに北滿の陣中より略儀乍ら暑中見舞まで 不

昭和十三年盛夏

謹啓嚴寒の候諸兄益々御清適の段奉大賀候

今般小生北支出動に對しては心からなる御配慮御後援を戴き誠に有難く衷心御厚禮申上候

滿洲里に於ける國境警備より突如北支出動を命ぜられ察哈爾、綏遠、山西の野に轉戦する事三有餘ヶ月其の間無事皇道宣揚に力の限り奉公の誠を捧げ微力ながら諸兄の御後援に副ひ奉つた事を衷心忻快と致し居り候

お蔭様にて本月廿五日無事〇〇〇の原隊に歸還致し候間他事ながら御休心被下度候

ソ滿國境風雲急なるとき再び我々は冷寒の國境線に立たねばならないと存じ候否我々は飽く迄皇運扶翼の爲仇なすものと戦ふ事を願ひ居り候

寒冷肌を刺すの候至誠一貫をモットーに緊禪奮發軍務精進致し居候間御休心被下度候
右御禮旁々御通知まで如斯御座候 敬具

昭和十二年十二月三十一日

支那事變
戰死會員

思

ひ

出

二



第三回 篠田省三君



君律原野 回〇三第



君治徳田町 回八二第



君三銀木鈴 回五二第



君治勝本榎 回四三第



君清子金 回一三第



君郎太頼中山 回〇三第

皇國の爲 護國の鬼となり給へる會員七柱の英
靈に對し 此處に謹んで哀悼の意を表するとと
もに 御靈の永に安らかならんことを祈り奉る

浦和中學校 同

窓 會

篠田省三君

君は明治三十七年八月十六日、北足立郡横會根村（現在の川口市横會根町）に、篠田又五郎氏の次男として生る。同村小學校を経て、明治四十年四月浦和中學校に入學、四十五年卒業迄の五年間學校自宅間を自轉車にて通學、體育の修得に、學術の研鑽に致々として精勵した。

君、資性快活、一面又濫良にして級友に親まれた。卒業後、大正四年東京慈惠會醫院醫學專門學校（現在の東京慈惠會醫科大學）に學び、斯道に精進せられたが學生としての君は誠に篤學な學徒であつた。在學中陸軍々醫委託生となり、大正八年卒業するや、陸軍三等軍醫を拜命。十一年二等軍醫に累進。十四年一等軍醫に任官、依願豫備役となる。この間、君は、金澤第九師團附としてシベリアに出征。豫備役編入後は、或は日本橋山村病院外科に、或は下谷高橋病院耳鼻科に、或は日本橋濱町優生病院小兒科等にて更にその研究を積まれ、成城學園附屬病院主任を経て、昭和五年現在の浦和市に開業。今回、支那事變勃發するや、昨年八月動員下令、直ちに上海に派遣せられた。上海の復旦大學、或は醫南大學に開設の陸軍病院にて、眞に不眠不休、戰傷病勇士の診療に活躍されたのである。偶々十二月初旬、君の附する〇團の杭州攻略の際には、君亦之に参加す。行軍の途中、湖州の手前、興塔鎮の東方約二千米の徐樓里附近に宿營中、敵敗殘兵らしき者の襲ふところとなり、十四日午後零時三十五分、こゝ江南の一寒村に永眠さる。君、出征後僅か半歳にしてこの難に遭はる。君の御無念をお察しする時、誠に哀悼に堪へないものがあるのである。

君一度杯をとれば斗酒なほ辭せざるの趣ありと雖も、その職に對しては常に細心、慎重を期して止まなかつた。君に愛兒忠昭君あり、その家庭にあるや誠に慈父。母校運動會の折、或は同窓會々場などに忠昭君を抱ける君のあの悌は今なほ眼前に彷彿たるものがあるのである。

「タダアキ、マイニチジョウブカ、オトウサンハ、シヤンハイデ、ロエイシテ、シナヘイト、タタカツテキルヨ、ソラニハヒコウキノバクダントウカラ、マイニチ、ヤツテルヨ。タイホウヤ、テツポウノオトガボン、キカンジウノオトハイサマシク、ナリヒマイテキルヨ。タツシヤデベンキョウシナサイ。」

「タダアキ、コノアヒダノウンドウクワイニハ、二トウシヨウラ、トツタソーダガ、タイヘンダツタネ。マタ明治ジングウトタマガワニ、エンソクガアツタソウダガ、オモシロカッタデンヨー、オトウサンハ、コノアヒダノ、ツヅリカタヲミマシタガ、タイヘン、ミンナジョーズニナツタヨ、ヨロコンデヨクミマシタ。コンド、マタ、オテガミラクダサイ。」

之は君が戦線から當時附屬小學校一年生であつた忠昭君に送つた手紙である。

君戦死の日、陸軍軍醫少佐に昇進。

次に君の戦死當時の模様を同窓金子揆一大尉の書簡によつて偲ぼう。

奥様其後元氣に御過しの由家内よりの返信にて安心致して居ります。多忙の餘り御便り申上げず失禮致して居ります。本日第一信にて誠に申上げ得ざる事を申上げなければならぬと何とも申上げられません。何卒御心を落つけて御讀み下さい。目下行軍途中で取急ぎますので且丁度郵便物を預つてくれる場所がありましたので御通知致します。篠田大尉殿は行軍途中十二月十三日午後十時二十分頃負傷せられ十四日午前零時三十五分遂に出血多量のため永眠遊ばされました。昭和十二年十二月部隊の杭州攻略の目的を以つてする前進に参加し行軍の途中十三日の夜營地たる興塔鎮の東方約一千米に露營中馬繫場車廠の巡視の爲め午後九時徒歩營舎を出發馬繫場及び道路車廠の巡視を終り厩當番車廠衛員に所要の注意並びに警戒上に關し指示したる後同十時二十分頃車廠西端附近にて狀況視察中敵敗殘兵らしき者より四發狙撃を受け二發は大腿部及腹部に貫貫銃創を受けられました。

恰度其時小生は連絡の爲他部隊にありましたが傳令が來ましたので承知し驚き駈けつけました。其時手術臺の上で手術中でした。私を呼んでゐたさうです。私が行きますと、兵站病院に一緒に行つて呉れと云つてゐました。併し出血が多かつたため手術が終つて間もなく永眠されました。誠に御氣の毒と言ふが、何とも申す言葉も御座いません。何卒御心強く御過し願ひます。

十二月十五日

金子揆一

伊藤部隊軍醫部長和爾忠隆氏書簡——

拜啓 この度は御丁寧なる御挨拶状を頂き有難く拜見仕候實は御主人御逝去の當時より御悔み申上げんものと考へ居り候處行軍其他の爲機を逸し失禮致し候爲不悪御諒恕被下度候

御主人様には御出征以來當師團第二野戦病院附として常に院長を補佐し部下を善導して實に同病院中樞の第一人者として御活躍被遊居り候處殊に蘊藻濱のクリーク附近の戦闘に於て同病院が大王宅に開設せる際の如きは外科主任として勞を厭はず終始奮勵連日連夜むらがる多數の傷者を處置看護不眠不休の努力は全く負傷者をして遺憾なからしめ以て病院の任務を達成せしめたるにて候

當時其の心情のあふるゝ診察を受けたる傷者一同が、感泣したるは勿論院長以下全員其の決死的努力に對し特に感激畏敬したる次第にて〇團としても其の功績の眞に拔群なるを認められ將來共に大いに期待申上たるに先般杭州攻略に参加壯烈なる戦死を遂げられたる如きまことに痛惜の至りにて申上ぐる言葉もなきばかりに御座候

されど奥様には既に軍人の妻として斯くなりたる上は故人の靈をやすましめる爲最善の努力を盡される様御決心の由にて其により御主人も定めて御安心の事と存じ候今後共折角十分御自重被遊皆様常に御健勝にて御子様方の御教育等に萬全を盡さるゝ様御祈申上候

先は右乍延引謹而御悔み申上候 敬白

二月二日

井上正嗣殿の通信—— 拜啓出征以來御無音に打過ぎ恐縮次第も御座いませぬ。私は出發以來種々御主人には御厄介をかけ通しにて初めて御便りする此の書面に此悲しむべき事を御送りせなければならぬと思ふと残念でなりません。大尉殿は去る十三日杭州に向つて行軍中除呂里と云ふ處で戦傷せられ午後十一時三十五分息を引取られました最後の水は私が大尉殿は酒がお好きの故差上げましたら一口ぐりと呑んで間近く昇天せられました。今少しく詳しく書きたいのですが行軍中故(十三日間の行軍)御容赦願ひます。いづれ歸つた節詳しくお話申上る事に致します。先は簡單乍ら御通知迄。

大尉殿のお側に居る氣で頭の毛とひげは私の胸にしかと納めてあります。草々

中學時代の篠田君

第十三回 山口 榮太郎

篠田君は當時横會根村から毎日雨の日も雪の日も元氣で自轉車で通學して居た。今でもあの元氣ではあつたが濃厚な風貌を眼のあたり思ひ浮べることが出来る。

成績はいつも十番以内で特に數學が得意だつたと覺えてゐる。それに器械體操が、づぬけて上手で體操の時間などに全クラスの者の前で模範的に先生からやらされて、はにかみながらも元氣でやりのけてゐた。卒業してからは私は御覽の通り商人になつたが篠田君は醫科に進みその後音沙汰なしだつたが軍隊から歸つて浦和に醫院を開業してから會つた時は實際あの中學時代の内氣な少年が實に立派な堂々なる醫者になつてゐるのにまづ驚いたが、それよりも偉い酒豪になつてゐたのには驚歎した。

六
そして實に明なお醫者になつたのには私等は同じ町に居る同窓生として非常に力強く又喜しく感じた。母校の野球部などには私等と共に大いに後援會のため盡力したのは後援會仲間でも感謝してゐる。今度の事變と共に出征して、あの悲報を聞いた私は夢のやうな氣がして現在こうして篠田君の話をしてゐてさへも戦死とは信ぜられず今にも驛頭から元氣で凱旋して来るやうな氣がします。

鈴木銀三君

君は明治三十七年十二月四日北足立郡大砂土村に生れた。大正八年三月小學校を卒業し次いで四月に本校入學、十三年三月第二十五回生として卒業された。

爾來家に在つて家業たる酒造業に従事されて居たが、昭和六年迎へられて鈴木家の人となり、上尾町に移り、同じく家業たる酒造業に勵んで居たが、同時に青年訓練所指導員、郷軍分會理事、或は消防組員等として郷黨の爲に盡す所亦多であつた。その間大正十四年十一月には一年志願兵として入營、昭和二年四月には曹長となり除隊、四年三月陸軍歩兵少尉に任官された。

然るところ昨年支那事變起るや、早くも七月三十日應召、成澤部隊鈴木隊長として出征された。同年十二月北支長城線康莊附近の激戦に參加殊勳を樹てたが、次いで鐵道警備、住民宣撫、匪賊討伐等に

亦武勳を輝かせしこと數次、今年三月一日夜、命により康莊東北三十軒の地點に在る上謨村に蟠踞した騎馬匪の討伐に小隊長として出動、同夜は四里餘を行軍し延慶縣城に一泊し、翌早朝砂漠の如き難路を強行軍、同七時三十分頃から徐々に敵匪賊に接近し、九時半頃より此處に攻撃は開始され、約二時間半敵は土壁の銃眼より猛烈なる抵抗を續ければ、隊長たる君は斷乎として立ち、敵を一舉に殲滅せんと萬難を克服しつゝ、最前線に奮闘し、眞に鬼神をも泣かしむる活躍中、敵弾は頭部を貫通し、血煙の中に君は最後の言葉

天皇陛下萬歲 大日本帝國萬歲

の聲を残して戦死されたのである。時に三月二日午前十一時五十分。行年三十五歳

斯くて此の日此の時、春未だ淺き北支の彼方に、貴き一つの護國の柱石は据えられたのであつた。

君は性豪毅、實直にして、常に帝國軍人たる事を誇として居つた。今や家には若き未亡人、一子功一君有り。世路の荒波、庶幾はくは彼等の上に心せんことを。

我々は次に書簡の一、二を掲載、君の面影を偲びつゝいさゝか英靈を弔はんとするものである。

君より自宅宛の書簡

拜啓愈々日に増し暖氣加はり凌ぎ良き氣候となりました。本日懐しき御手紙落手致しました。厚く御禮申上げます。家庭の皆様御丈夫で多忙の裡に御暮しの由、何より喜ばしく存じます。小生も御蔭様で元氣で壯健毎日の勤務に執掌致して居ります。何卒御安心下さい。家庭の皆様御奮闘に依りまして何

等更に後願の憂なく、尙本年度清酒製造成績もいとも好成績にて来る二十二、三日を以て御終了の山承り何んと喜ばしき事かたゞ涙が湧いて來ます。

小生等も本夜は夕點呼の際大本營發表の電送ニュースを拜聴致し、將兵一同の喜びは誠に想像以上であります。共に御喜び下さい。櫻花も満を持して色も濃く、晴天世界中の花として咲き綻ぶでせう亦一生に又とない晴れて日本の名花を心行くまでにながめる事も出来るものと存じます。功なり、更に有終の美を修めますまで厩一層、緊張致しますと同時に、奉公の誠を盡します。何卒家庭の皆様御壯健にて銃後の守り宜敷御願ひ致します。では亦後便にて（二月二十日）

職友より遺族宛の書簡

謹んで御夫君銀三氏の名譽の御戦死に對し哀悼の意を捧げます。本五日正午より御夫君の陣中に於ける告別式に参列させて頂いたゞきましたので御戦死の御様子を御知らせ申上ます。

私も一月二十日以来〇〇縣城警備の獨立任務を帯びて當地に参りましたが、二月中旬以來共產匪の活動は食料不足と氣候の溫暖に伴ひ活潑になりました。二月二十一日に二討伐を實施し、二月二十八日には矢島部隊の討伐に私の部隊の一部を應援に出しました。まだ鈴木君の駐在地に到着しない中に〇〇縣城が〇〇名の共產匪の襲撃を受けました。成澤部隊の應援部隊全部は私の方へ急行その時は一時苦戦に陥りましたが、敵は參謀長、副官の死體を残して急援隊到着以前に逃走致しましたので、早速敵の在所をつき止めて三月二日拂曉敵の寢込を襲つて、多大の損害を與へまして、午後四時歸りました。鈴木君の御戦死を知り夢かと許り驚いたのです。三月一日に矢島部隊の討伐中止は本部より承

つたので安心して居りましたので私の驚きは二層でした。鈴木君とは聯隊で十五日間、南口で十五日間宣化で一ヶ月共に警備に關はつて居りましたので、若しも凱旋出來た時は、同業者と云ふのでなく、親戚として大いに研究し、共に酒界の爲めにやらうと毎日の様に話し合つて居つたのです。同僚の間柄も鈴木君でなく、銀ちゃん〜と隨分部隊中でも將校仲間にも慕はれた銀ちゃんでした。その上下下からも尊敬の的となり殊に昨年十二月十六日の姚花河の戦闘の時の指揮官としての態度の立派なる事、その時は私も命に依り、應援に参加させて頂いたゞきました。羨しい程、部下の兵隊さんはお賞め致し敬服して居りました。

こんな事を考へますと、今度の御戦死全く残念でなりません。

以下戦闘中の概況です。既に矢島部隊長より御通知の事と存じますが、これは私が本日告別式に参列して一將校より承つたる事です。

三月二日午後五時三十分命令により、矢島部隊長は鈴木〇隊を以て矢島部隊長駐在地を午後九時出發行軍八里、三月二日午前九時三十分より攻撃開始し、敵は共產匪一五〇名、部隊は完全に敵を包圍致し、まして、約半数を射殺し、成澤部隊としては未だ嘗てなき戦果を修めましたのですが、不幸敵の一弾は、鈴木君の頭部に命中、時に三月二日午前十一時三十分、早速後方部落にて御手當を致しましたが、十二時五十分、天皇陛下萬歳を唱へまして御戦死をなされましたのです。途中部落に收容中も「敵は、敵の状況は」と部下に問はれたとの事をお聞きしまして、指揮官としての貴さを痛感し鈴木君にしてこの一言ありと存じました。

最後には部下の銃を取つて射撃なされたとの御事聞くだに崇高なる御精神には敬服と申しませうか、

神様の如き貴さを感じました。之と申すのも、鈴木君の軍人精神の旺盛なる事は勿論の事なるも、御留守宅の皆様の銃後の護りの完璧の然らしむる處と敬服の他は御座居ません。死は戦場の常とは申し、國家の爲にも貴家としても、なくてはならぬ鈴木君残念でなりません。

告別式の今日は稀に見るおだやかな日でした。昨日の雪で一面の銀世界、地と云ひ空氣と云ひすつかり清められました。生前の鈴木君の純潔なる御精神そのものでした。我が部隊の代表ばかりでなく、上は〇〇兵團長より沿線の驛員察南政府の三縣の縣長(縣知事)公安局長(警察部長)まで参列、心から鈴木君の御戦死を悼んでくれました。式場には十數個の弔旗、花輪が飾られ、式は日、支兩式の佛式で行はれました。鈴木〇隊長殿をお慕して居る部下の兵隊さん代表の弔辭には私も戦場に居る我が身を忘れて泣けて仕方がありませんでした。

鈴木君は我々將校仲間では、既に銀ちゃん(〇〇)の定評あり、部下に對しては温情の限りを盡し一度戦鬨に當れば嚴然としたる指揮振り正に武人の典型です。戦場の友として、郷里にあれば同業者として考へると考へる程残念でなりません。

事變も既に第一段階を終りまして、長期戦は更に長期を豫想せられて居ります。必ずや鈴木君の仇は埼玉縣人の私にとらしていただきます。若しも命永らへてお目にか、れましたその節は親しく御報告申上げる事と致しまして本日は之で擱筆させていただきます。

帝國軍人として立派な御行動重ねて敬意を表します。矢島部隊長より詳細報告の事と存じますがいろいろ取りまぎれて居る事と存じまして大略を御報告申上りました。矢島部隊長もほんとに頼みにして居つた鈴木君を亡くして大變残念に思つて氣も心も沈んで居ります。何卒御家庭の皆さん杜氏さんにもよろしく。

三月五日午後十一時

〇〇派遣〇〇兵團成澤部隊

松岡部隊長

鈴木君を偲ぶ

第二十五回 秋 池 潤

鈴木銀三君長城戦に殉ず。全く感慨無量だ。君は應召、兩來勇猛成澤部隊の團將として長城戦攻略の聖戦に活躍せられ、その果敢なる奮闘振は君が颯爽たる英姿と共に屢々東朝紙上に拜見し、いつも乍ら意を強うし唯々君が武運の彌久しからんことを祈りしに、無念、敵弾の貫すところとなり、壯烈無比なる戦死を遂げらる。今や君が英姿を見るに由なく、嗚々たる天嶮居庸關の嶮も近き康莊驛頭、毅然と立てる君が忠魂の碑に思ひを馳せ遺影を偲びつゝ、靈に捧ぐ。

今は昔か……。僕等の時代には自轉車で通學する者、テクル者とかなりあつて、僕と鈴木君とは自轉車組でよく一緒に車を並べては通つたものだ。途中でテク組を車の後部に乗せたりして行つたこともある。心持兩肘を張つてベダルを踏む彼の姿が今も眼に映つるやうだ。さて通學の途中はどんな話題に花を咲かせたか、今はもう思ひ出せない。いづれ僕等のことだ。たわいもないことに打ち興じた以外取りわけ印象を残すやうな事も無かつたかも知れない。君は自轉車は仲々の達者で見沼川の假橋——と

言つても一、二尺程なのをふつとばす元氣だつた。笑ふ時には心持頭を前に元氣よく笑ふ眼鏡をかけたあの風貌は誰でも好感のもてる男だつた。

卒業すると誰もがする同窓の噂話、これを遊びにきてはよくやつたものだ。K君は？E君は？と、話す彼の話術はとても上手なもので巧に「間」を置いては愉快に談笑してゆかれた。

鈴木君は北足立郡大砂土村砂の出身、嚴父は酒造業を営む村での舊家、卒業後はしばらく家業を助け、て居られたが同郡上尾の酒造家で屈指の資産家鈴木家に迎へられたのだ。今次の事變に際して應召出征された事には實の處僕は少しも心づかずに居つた。所が東朝紙上の鈴木少尉奮戦とある記事を讀むと鈴木君ではないか？「奴」やつてゐるなと思つて掲載の軍帽姿の同君を視ながら長城戦死守振を熟讀したものだ。家族の方々はどんなにか目頭をあつくしてゐる事だらうと思ひながら……幾度も繰り返して讀むのだつた。

其後鈴木君は共産匪賊の討伐行をやつて居つた。どんな時でも決してあわてずいつも元氣一杯な指揮振り、しかも部下思ひの小隊長として成澤部隊上下の信望もたゞならぬ隊長だつたさうな。其の鈴木君も遂に京綏線延慶の東北方十五杆陽坊の激戦に華と散つたのである。如何に奮戦されたかは康莊驛頭毅然と立てる同君の忠魂碑がその烈々たる武勳を表して餘りあるものがあらう。

今や護國の英靈靖國の神となられた鈴木君。靈よ。思ひ出は盡きぬ。敢て無量なる感慨を捧げて君が冥福を祈らう。

十二月十日

町田 徳治 君

君が北足立郡加納村に生れたのは明治四十一年十二月二十五日であつた。次いで同村小學校を経て浦和中學校に入學したのが大正十一年四月。爾來五年間、君は居村加納村から桶川驛まで徒歩、桶川から浦和までを汽車にて通學。四年迄は無缺席で通じたのであつた。君の眞摯にして倦むことを知らず、孜孜として勵むその態度は既にこの頃からよく現れてゐた。一見重厚なその風格は、君を知るに及んで、その友情の甚だ篤きを知るのである。

昭和二年浦和中學校を卒業、東京高等師範學校理科に學ぶ。かくして君の眞摯篤實の美風は益々その學風にも及んでいつた。高師卒業後は京都府立第三中學校に奉職。その教壇に立つや、篤學素朴なる學徒として、生徒に及ぼした感化は大なるものがあつた。君京都に留ること數年。昭和十一年、君は氣象學の專攻を志し、東京文理科大學に入學。在學三年、卒業後は熊谷飛行學校所澤陸軍航空技術學校に職を奉じ、愈々斯學に精進したのであつた。偶々熊谷飛行學校機の耐寒上空氣象觀測研究飛行に際しては、技手として之に搭乘。同日午後には歸校の豫定のところを遂にかの吹雪に遭遇。新潟縣銀山平上空にて遭難、機は不時着の餘儀なきに至つた。其後君の遺骸は機體より稍距りたる附近の雪中にて發見された。君遭難の日陸軍技師に任ぜられ、從七位に敘せらる。三月二十五日所澤陸軍飛行學校にて陸軍葬を以て葬儀執行。越えて四月十一日午後一時君が居村加納村は村葬の禮を以て厚く君の靈を弔つた。

前途有爲の青年學徒を失ひたるはその損失惜しみでも猶餘りありと言ふべきであるが、君が平素の研

究に身を以て殉じたるは又以て男子の本懐と言ふべきであらう。

君はその學生たると、家庭にあると、教壇に立てるとを問はず寸時も書を手離したること無しと。この一言實によく君の性格を偲ぶべく、又學徒としての君の一生を現したものと云ふべきである。希くは君の靈の安らかならんことを。

君が生前の文章一編同窓持田君より送らる。依て之を茲に掲ぐ。

熊

町 田 徳 治

本年(昭和五年)七月私は級友十餘人と共に北海道を旅行し白老といふ處のアイヌの酋長の家を訪問した。今焼酎を一升許り平げたところだといふ酋長が、アイヌの生活状態を語るのをきいた。同窓諸兄の中には北海道に詳しい方も多いと思ひますが、此の酋長の話とアイヌの足跡といふ本を参考にして熊について書いてみます。

小學校のとき私は「北海道の熊は河から魚をとつて笹にさし通し自分の棲家に持ち歸る。此の時笹につなく丈の智恵はあるが、先を結ばすかついでゆくので途中皆落して仕舞ふ」と教はつた。これは單なる笑話であるさうだ。

熊と昆布とは北海道の名産で四五十年前までは殊に熊が多く秋には、河川の水が止まる程の群がのぼ

つたとさうだ。

熊は河岸で其の鮭を爪で引き上げ喰ひ、又持歸るが兩手で鮭を抱へ後脚で人のやうに歩いてゆくのである。

人が熊に追ひかけられたときは、死んだ眞似をすればよいと聞いてゐる二人の青年が、熊に追ひかけられ、一人は木に登つたが、他の一人は間に合はず死んだ眞似をしてゐたら「友を捨て、逃げるやうな者と交際するな」と熊がさ、やいて行つてしまつたといふ話があるが、此の話は北海道の熊にはあてはまらない。熊は死んだものを喰はないどころか、墓地で死體を掘り出して喰ふこともある。熊はよく走りよく泳ぎ木にも登る。山中で熊に見込まれたら最後だ。何んでも所持品を投げると熊は其の品を細々に引き裂き打ち壊した後追ふといふからこの方法がよいらしい。

然し熊は人を見れば必ず追ふものではない。仔熊をつれた牝熊、一度人に負傷させられたもの、特に餓えてゐる熊は人に迫る。

秋十月全山紅葉すると到る所山葡萄が熟し、附近村落の男女は三三五五打ち連れて採りにゆく。

先に葡萄の木に上り食べてゐる人に挨拶し、後から上らうとすると豈計らんやこれが熊であるのを知り、命から逃げることもある。熊は葡萄が好きなのである。馬は熊より走るのが速いが、馬は熊を恐れること甚だしく熊を見ると腰を抜かし佇立してゐる。熊に負傷させられてから逃げようと思ふが最初から健脚を利用すれば逃れること容易である。熊は馬を殺すと數日間通つて喰ふ。アイヌ人は熊をとるのに今でも弓矢を用ひる。不完全のもので、こんなもので熊が殺せるかと私は怪んだ。鐵砲では命中しても急所でないと思ふだけで或は逃げ或は反抗する。

アイヌ人は矢にトリカブトといふ毒草を蔭干しにして矢の先につける。この矢ならどこにあたつても毒は熊の全身に廻り數分の後確實に死ぬと。(第二十八回有志同人雜誌「どる」掲載)

町田徳治君の殉職

第二十八回 藤井 一五郎

熊ヶ谷飛行學校所澤分教場より耐寒試験飛行に出た飛行機の遭難の報が新聞に出て世人を驚かした時吾々浦中卒業生は、殊に廿八回卒業生は、特に吾眼を疑ふ程驚いた。遭難者中に懐しい舊友の名を見出した時は、眞とは信ぜられなかつた。掲げられた寫眞を見て矢張りさうかとは思つたが餘りの事に何の感じも出て来ない。唯呆然となるばかりであつた。

あの沈黙家で、而も仲々人間味のある町田君が……と思ふと矢張り嘘の様な氣がした。然かしそれでも町田君は矢張り何處かでウフンなんて笑つて居る様な氣がした。

愈々遭難現場がわかり救援が絶望となつても如何しても生きて居てくれると思はれた。現場にあつた尊い殉職者の中に町田君の身體がなく行方不明と報導された時は、何處か麓の民家に辿りついた町田君の姿を頭に描いて居た。狼狽する所を一度も見せた事のない君に對しては雪の中でも裕々と微笑んで居る姿のみがまなかにかゝつて、如何しても悲しい姿は考へられなかつた。

處が御留守居の令闈から陸軍葬の日取を知らして頂いた時は、ハツとして暗い氣持だつた。御宅には

既に佛壇が出来て居た。御家族や親戚の人、近處の人が出入りして居た。

靜かにゆつくりと町田君の死んだ事を心に浸みこませる暇もない。唯遺品の前でどうしても信じ切れぬ事を信じなければならぬウスラ淋しさを感ずるのみだつた。

周圍はあわたゞしくて、靜かに感慨にふける間もない。

陸軍葬の場面は莊嚴なものであつた。七勇士の黒ワツクの寫眞と、白地に太く官氏名を誌した長い布、參謀總長の宮殿下、陸軍大臣、海軍大臣、以下顯官よりの花環にかこまれて、神々しくも、町田君の靈は左手よりに、高く壁間に掲げられて居た。

式の進行につれて黒紋附と白無垢の襟清々しい御遺族の中からすゝり上げる聲が聞える。いたいけな幼子がバタ／＼と靜かな祭場に足もたど／＼しく歩み出て、父君の靈前で無邪氣に騒いで、母君に抱つて／＼と呼ぶ。その母君は手に生れたばかりの赤子を白いケープに包んで抱く。はふり降ちる涙を拭ふ手も子につかまれて唯々面を押しかくすのみ。その愁傷の中に町田君の令闈と幼い遺兒が並んで居られる。

神式の祭場なれば笹簾の哀調堂をしめらし、あはれは深い。

式後遺骨は遺兒の待つ自宅に送られて吾等も焼香し御通夜をなす。浦中より土肥先生、所澤商業學校長、元浦中に居られた早野先生、同級生持田庄三郎氏と小生會す。共に陸軍葬場より連立つ。故人の生前の話なすに盡くる處を知らず。

翌朝早野先生御宅にて休息させていたゞく、起きれば先生既に寺に行きて僧侶の心配等盡力せらるゝこと多し。その後承るに先生は一週間の間毎夜靈前にて御通夜をして下さつた由。故人の靈も、その後

に行はれた生家のある村の小學校に於いて、村葬を営まれ、永久に安らげくをくつきどころに行く日まで、星野先生に夜々側に居て戴いて、うれしかつた事だらう。

村葬も雨の日に行はれたにも抱らず盛大に営まれた。その日早く所澤より自動車にて遺骨は遺族、親戚、恩師舊友に附添れて一路生家に向ふ。村境に到れば青年團軍人會員等の出迎をうけ、一應生家に安置されて佛式にて經、香を捧げられ、次いで小學校の設けられた壇場に安置せられた。浦和中學校長代理土肥先生、同窓生代理不肖多くの人に交つて弔辭を捧ぐ。早野先生は勿論持田君内木英二君會葬せらる。

昔の學び舎に歸つて村童を前にした故人の寫眞も、ありし日の思出に、思ひなしか、和む様に見受けられた。

町田君も東京高師を出て京都第三中學教諭から文理科大學に學び、卒業と共に陸軍飛行學校の氣象研究を委囑されて、實に華々しい前途を囑目されて居たのに、本當に惜しいことをした。その逝去を悼むには千萬金を盡すとも尙及ばぬのだが、此の名簿の性質上、唯通信だけを誌して擱筆。謹んで哀悼の意を表し、舊師、母校の御親切を謝し御遺族の前途の御多幸を祈る。合掌。

空の勇士町田陸軍技師を憶ふ

第二十八回 持田庄三郎

「熊ヶ谷飛行學校所澤機遭難す、搭乗者の生死氣遣る」と報道されてから一ヶ月、此の間吾々は速なる

遭難機の發見と搭乗者七名の奇蹟的生還とを祈らぬ日とはなかつたが、不眠不休然も連続的に決行されたであらうところの決死的大搜索飛行等と共に報いられず、雄々しくも遂に其の機と運命を共にせる殉職者の發見せられたのは三月半過のことであつた。二月十八日、彼の猛吹雪を肩して政行された氣象觀測の大試験飛行、其の勇士等の生還をゆるさずして殉職者たらしめたのは天の悪魔の爲せる業か、遭難地方は北國の銀山平、それは人跡未踏とも云ふべき、深山幽谷の地であつたさうである。其の遭難當時の消息は搭乗者の笠井航空兵少佐に依つて詳細書遺され新聞紙上にも掲載せられたのであつたが、其の従容たる措置等はさきの佐久間艇長に勝るとも劣らずと賞揚せられたのであつた。

東亞再建設の進捗せられつゝある此の有事の秋、此等勇士を失ひたることは邦家の爲害に惜みても尙餘ありと言ふべきである。我が同窓町田徳治君(當時技師)も其の尊き犠牲者の一人である。三月二十五日所澤飛行學校將校集會所に於て學校葬が執行せられ、超えて四月十一日郷里加納村に於ては君を葬むるに村葬の禮を以てしたのであつた。

町田君は人と爲り資性濃厚にして、友情に篤く、學究的で然も一面不言實行の人であつた。

それは昭和二年十二月の末、寒風吹荒ぶ真夜中、當時東京高等師範學校に在學中の君は倉皇として私を下宿に訪ねてこられた「高師受験の浦中同窓生が、僕の部屋を占領?してしまつたので寝る席がなくつた。汽車に間に合へば家迄歸へるのだが、其の汽車ももうない、場所をよくきいて來なかつたので一時間も探したよ」と微笑を浮べながら額の汗を拭き、入つて來られた。其の姿が未だはつきりと臉に残つてゐる。君はかうした奥ゆかしい心の持主であつた。即ち己が身を省ずして他人の爲に盡された人である。

又浦中在學五ヶ年、腹を立てのを見たことがなかつた。然しこれは決して意氣地無しであつたといふ意味ではない。私の記憶にある君は言ふべきこと、質すべきことは毎に堂々と言ひもし質しもししてゐた。曲つたことの嫌ひな人であつたとも云へよう。成績も優秀で數學は殊に得意中の得意であつたやうであつた。彼の明哲なる頭脳とガツチリした體軀とを以て常に倦まず撓まずヨツ／＼と勉學を續けられてゐた。どちらかと言へば無口の方で此方から話かけなければ仲々先からは話なかつた。

高師卒業後京都府立第三中學校に教鞭を執られるやうになつてからは、同時に赴任された大阪池田師範學校の藤井君を通じて其の便をきくに過なくなつたが、學究止み難く更に進んで東京文理科大学物理科へ入學同校卒業後所澤飛行學校に奉職航空氣象學の研究に専念せられてゐたのであつた。

昨年春三月浦中卒業十周年記念の同窓會が、驛前の「花園」で催され君も欣然振つて参加されたのであつたが、其の後會ふ機會もなく遂にそれが最後となつてしまつた。

今君が追悼文を草するに方り萬感交々至つて云ふべきことも記し得ないが、只管君の御冥福と遺家族の方々の御健康と御多幸とを祈りつゝ筆を擱く次第である。(M. I. I. I.)

野原 律 君

君は明治四十四年八月二十七日野原喜久松氏の長男として原市町に生れた。原市尋常高等小學校を経て大正十三年四月浦中に入學し、爾來五星霜雪の功を積まれたが、資性濃厚篤實、何事をなすにも熱

心、著實で、殊に其の孝養心に篤く、朋友を思ふ純情に至つては友人の等しく欽慕する所であつた。仲々の努力家で、繪畫、テニスをよくし、又劍道に長じてゐた。昭和四年三月第三十回生として浦中卒業後、東京簿記學校に學び、翌五年五月同校を卒業したが、其の間家業に精勵するかたはら斯道に精進を續け、昭和六年五月には武徳會より初段を允許された程である。尋いで昭和六年十二月一日幹部候補生として近衛歩兵第二聯隊に入營し、昭和十年三月陸軍歩兵少尉に昇進し、正八位に敘せられた。

君は毫も名聞、榮達を願はず、孜孜として家業に勤むと共に一方町立青年訓練所指導員主任、帝國在郷軍人會原市町分會副長の榮職に任じ、出征前迄上尾、桶川區十一ヶ町村聯合青年訓練生の總指揮官として、専心青年を率ゐて之が指導訓練に献身的の努力を惜しまなかつたのである。

今事變勃するや、昭和十二年九月十三日勇躍應召して野戰〇〇第一中隊杉村部隊に屬し、第二小隊長として従軍し、九月二十七日上海上陸以來、或は上海戰線揚子江附近の戰鬪に、或は鎮江攻略戰に、或は又揚州附近の殘敵掃蕩に重大任務を帯びて奮戦力闘し、中にも天長城一番乗りを決定して千載に朽ちざる赫々たる武勳を樹てたのである。以來各地に轉戦したが、本年四月九日揚州北方邵伯鎮の激戰に不幸敵の埋設地雷にかゝり、戰車は大破し、君は左足に重傷を負うて揚州野戰病院に後送されるに至つた。其の後經過良好にて漸次恢復に向ひつゝあつたが、二十一日突如破傷風を併發し、遂に左足關節部を切断するの急變に遇ひ、病勢頗る悪化して扁鵲の至術も及ばず、二十七日午後一時五分終に溘溘として陣歿したのである。享年二十八歳。

皇國の爲護國の鬼と化するは素より男子の本懐なりとは云へ、誠に痛惜の念に堪へざるところである。次に掲載した君の書翰の内、(一)は學校並に同窓會宛のもの、(二)(三)は家族の方々に寄せられたもの

である。

(1)

拜啓 春とは云へ寒さ益々厳しき折柄皆様益々御健勝のこと、存じます。此の度は盟和會より心からの御慰問の品々御贈り下さいまして有難う存じました。小生幸ひ九月初旬應召出征、未だ硝煙けぶる上海に上陸以來、各地に轉戦微傷だも負はず益々頑健にて従軍致して居ります。只今揚子江北岸揚州と云ふ所に居り第一線部隊として活躍致して居ります。此處でお正月を迎へました。殺風景な戦地でも松竹を立て餅を搗いて賑やかにお正月を祝ひました。只今小生戦車隊(〇〇車)小隊長として活躍致して居ります。

忠勇なるわが將兵の奮闘により既に御承知の如く、彼が數年間を費して築き上げた鐵壁大場鎮を陥れ矢次ぎ早に蘇州河、南翔、嘉定、太倉、崑山、常熟、蘇州、無錫、常州、金壇、丹陽、句容等の敵首都防營の堅陣をまたたく間に陥落せしめて前古未曾有の快勝を得、遂に去月首都南京を陥落せしめ歴史的大偉業を完成せしめたのであります。是れ陛下の御神威の然らしむるところであることは申すに及ばず吾々將兵が死線を越えての勇戦奮闘と一方又銃後の皆様の舉國一致の賜であります。吾々はこの大勝利の裏に幾多護國の鬼となられた將兵のことを決して忘れることは出来ません。

肉弾以て敵壘を抜くことは各所に演ぜられ皆様も新聞紙上、ラヂオニュース等で御存じのことであり日本軍の最も得意とし世界無比のものであります。一方此の度の事變にて特に最前線にあつて偉大な活躍、成果をあげつゝある科學兵器、即ち飛行機、吾々の戦車等の働きを考へる時今後將來戦の爲に

111

吾々國民は大いに此の方面の整備に心せねばならんと存じます。最前線歩兵の話を開くと協力する一臺の飛行機、タンク等吾が士氣を百倍せしめ、雲霞の如き敵何ものぞ朝飯前だとの氣持になるさうです。吾々戦車隊が爆音高く最前線に勇姿をあらはす時期せずして歡聲があがります。全く戦はずして敵をのむの有様になります。一方これを敵から考へて見た時何うであります……統制なき攻撃精神に缺くる彼等としての驚きは想像に餘りあります。特に速戦即決の吾が傳統の戦法を考へる時無比の日本魂に有力な兵器が大切です。鬼に鐵棒でなければなりません。

暴支膺懲、東洋平和の確立を期し抗日侮日を根絶する爲には徹底的に膺懲して彼等をして眞に悟らしめねばなりません。戦の前途は遼遠であります。益々奮闘奉公の誠を盡す決心で御座います。

向寒の折皆々様一層の御自愛を中支の空よりお祈り申上げます。

先づは御禮旁々御一報申上げます。亂筆お許し下さい。敬具

一月九日揚州にて
野原少尉

(1)

前略吾が部隊最前線に活躍する様になつてから幸ひ上天氣續きにてしかも割合に暖かく全く助かります。

只今南京の東北二十里程の揚子江の北四里位の揚州(一名江都城)の城内の立派な富豪の邸内に居ります。主人はもう何處へか逃亡して居りません。支那にもこんな大盡があるかと思ふ程立派です。室内

111

は支那、西洋式を一緒にした様な作りです。自家用のステーム、水道も各部屋を通つて居ります。泉水には戦が何處にあるかと云ふ様に金魚が泳ぎ廻つて居ります。

今日は十二月十七日です。この街の攻撃をしたのは十四日の日でした。天ヶ谷支隊に吾々は協力したのです。十五、六日頃の新聞紙上に報道されたと思ひます。

絶えず最前線を承つたのは鎮江要塞の攻撃と此處と數里東の仙女鎮と云ふ處です。幸ひ吾が部隊は敵彈雨飛の中にも一兵の負傷者も出ませんでした。華々しく戦車にて敵を蹴散らすのは全く愉快なものです。

もう南京も十二月十三日陥落し今日あたり入場の筈です。大勝利は吾が手にあります。吾々は多分こゝで年越しをすることになるでせう。

戦線をかけめぐること數百里、こゝでは野戦郵便局も開設されて居りませんので故國よりの便りも一通も手に入りませんし手紙を書いても今の處出すことも出来ません。この手紙も何時になつて出せるのやら分りません。達者で活躍して居ります故御安心下さい。

十二月十七日揚州にて

皆 様

律

二伸 今日十九日であります。書き足します。自分は新しく任務をもらつて揚州より十里程西方の〇〇十二〇の守備に廻されると思ひます。戦車三臺其他だらうと存じます。大いに身體に氣をつけて頑張る考へです。匆々

(三)

今日は三月十一日であります。揚州は一昨日から雪が降り出し昨日の朝まで續きました。氣温が又ぐつと降り零下三度位になりました。今日も又雪になりさうな薄曇りの朝であります。一昨日は甘泉山鎮方面のクリークへ落ち込んだ貨車二輛を野原少尉引揚げ班長で雪の降りしきる中を一日、引揚げに参りました。連日の雨と加ふるに雪で道路としても悪しき爲乗つて行つた戦車二輛と貨車一輛もまかり間違へばクリークへ落ち込みさうになります。道狭く里土の様な道でも滑ります。朝から出動して甘泉山に着いたのは正午、同地にて晝食、同地にて土民を百數十名狩り集めて引揚げ作業に取り掛りました。自動車は五尺位の堤下の水中に埋まつて居ります。長いロツプをくゞり付けて綱引の要領にて戦車二臺と土民百数十名で引つばつて約二時間の作業で引き揚げ終りました。一臺の方は何うしても揚りません晴天續きになつてから揚げることにして揚州に歸りました。野原少尉以下三十三名皆一日中雪の中での作業で全身濡れ鼠になりとても寒かつたです。それでも一臺引揚げすることが出来たので隊長より非常に感謝され夕食には特に引揚げに行つたものに對して酒肴の馳走がありました。昨日(三月十日)は陸軍記念日で午前九時より式があり部隊長の訓示大日本帝國の萬歳を行ひました。正午から前庭にて降り積つた雪をながめながら宴會、附近の支那人約五十名がお客に参りました。色々と野戦料理の御馳走が出ました。日本の唄、踊り支那の唄、踊り等とても賑やかです。只今揚州では小學生に對して日本語、唱歌を教へて居ります。先生は吾が杉村部隊よりも一人(勿論兵隊です)出て居ります。八歳から十歳位の小供が「君ヶ代」「白地」「紅く」等の唄をうたつて遊戯をやつて見せました。とても上手です。娘達はそれゝ得意の支那唄です。中々盛大に午後四時會は閉ぢられました。今日は又英一叔父さんが送つてくれ

る新聞の三月十日より二十日頃迄が藤田部隊川並部隊氣付にて参りました。松井部隊及び軍司令部氣付のやつは何處かへつかへて居るのか誰にも二通も参りません。今日から三月廿五日迄車輛の整備です。あちこち故障の車がなほ居る頃は内地歸還と云ふことになりさうです。恩賜の煙草を送らうと思つたが包装材料がないので送らずに持つて居ります。全員無事元氣ですから御安心下さい。又お知らせ致します
三月十一日揚洲にて

皆 様

律

野原君を偲ぶ

第三十回 鈴木秀吉

「やれるだけやつてくるから、待つてくれ」

野原君が、軍刀をしっかりと握りしめて、力強く「萬歳」を叫んで出征されたのが一年前のことであつた。野原君!! 君は今、護國の英靈となつて、天界に去られてしまつたのだ。そして、今、君の思ひ出を書かうとは、全く感慨無量のものがある。

野原君

君は「律ちゃん、律ちゃん」と、誰からも信頼されてゐた。原市から上尾まで自轉車で、それから一緒に汽車で通學したが、君は本當に穩健な人であつた。着實に、正確に、しつかりと一歩々々を築きあげ

て行く人であつた。汽車の中でも、決してむだに過すやうなことはなく、何時も、何かこつ／＼やつてゐた。そしてすべての事に誠實さを以て、あたつてゆかれた。生眞面といひたい程の熱心さをもつて、事にあたつてゆかれた。劍道にしても、テニスにしても、君は地味なだけに、表だたなかつたけれども、たいした腕前を持つてゐた。僕等が三、四年の頃、上尾と原市とで時々、テニスの試合を行つたが、君に打負かされたことが何度あつたか。

君は又繪も大へん好きだつた。風景畫に何か特色のある描き方をし、展覽會毎に出品されてゐた。晩秋の田圃へ、松林の方へ、よく寫生に出かけたことが思ひ出される。

いつでも君と話してゐると、何か強くまねてみたいものを、誰もが感じてゐた。それ程君には、偉いところがあつた。中でも僕が、君に對して、誰よりも、強く感じてゐたことは君の孝養心の厚いことだつた。君は、本當によく、家業の手傳ひをやつてゐた。酒造家の長男であつた君は、酒樽や、瓶詰をリヤカーに積んでは、上尾の方へ毎日のやうに來てゐた。その仕事を、君は全く楽しさうにやつてゐた。卒業後、簿記の學校にも通ひ、その熱意さには誰も感じ打たれない者はなかつた。町で通りすがると、君は自轉車にまたがつたま、きつと種々のことを話しあつて行かれた。僕達には、それが又どんなに楽しいものであつたか知れなかつた。君の話は必ず「親を早く安心させたいんだ」といふ考に、こり固まつてゐた。

不起の重傷を悟つて、最後に、父上に寄せられた書面、君の平素の行を知れる者には、一入感慨深いものがあり、痛惜の念に堪へないのである。

「やれるだけやつてくる」

祖國の爲にやれるだけやつて「殉じた彼の生涯は、何より尊い。蕪雜な思ひ出を草しながらも、君の勇躍して征かれた姿が、眼底に、まさしくと浮かんでくる。

山中頼太郎君

君は縣下秩父郡大瀧村の名家山中宗治氏の長男として、明治四十三年四月十二日同村大字大瀧に生れた。遙に靈峯三峰を望み、近くに荒川の清流を聽く、靜寂な環境が、君の悠揚迫らざる性格を形成するに與つて力あつた事は勿論である。

秩父尋常高等小學校高等科一年を修了するや、特に本校の校風を慕ひ來り學んだ。在學中は、孜々として勉學に努むる極めて眞面目な生徒であつた。

劍道には拔群の技術を有し、大日本武徳會より初段を允許せられ、本校劍道部のため延いては全生徒の士氣を鼓舞するために盡した功績は大なるものがあつた。

昭和四年三月優秀なる成績を以て卒業し、浦和高等學校文科に學び、ついで東京帝國大學法學部に入學英吉利法律を專修した。

卒業後埼玉縣經濟部商工課に入り、やがて縣屬に任ぜられた。縣廳に奉職するや、直に病床に在る父上を郷里より迎へ看護に心を碎き孝養の誠を盡した。

本年三月一日補充兵として動員令を受け、赤坂歩兵第一聯隊に入隊、三月十日原隊發北支に赴き北支

駐屯山下部隊に編入せられ、北京附近で更に訓練を受けた。五月中旬徐州戰線に向つて勇躍出發し殘敵を掃蕩しつゝ、前進、六月一日河南寧陵縣附近の激戰で奮戦力闘中頭部貫通銃創を受け「天皇陛下萬歲」を絶叫しつゝ、陣歿した。戰功により歩兵上等兵に昇進した。

一死以て君國に報ずるは丈夫の本懐とはいへ、永の病床に在つて、唯一人の愛息の戰死の報に接せられた父上の御心中を御察しすれば今更いふべき言葉はない。唯君の冥福を祈るのみ。

隊長よりの戰死狀況及慰問文

謹啓頃者暑熱劇しき折柄愈々御健祥の段慶賀申上候陳者今般當部隊徐州會戰に参加の爲め出動に際して山中頼太郎殿儀去る六月一日河南省寧陵縣火食店附近の戰闘に於て勇戦力闘遂に名譽の戰死を遂げられ候につきては素より帝國軍人としての本懐を達せられ候事とは申し乍ら寔に痛恨の至りと存じ深く哀悼の意を表し奉候實は早速御報知旁々御挨拶申上可き筈の處中隊は最前線にて敗敵を追撃致し居り候ひし爲め後方との聯絡も意に任せず今日迄遅延仕失禮の段は何卒御海容被下度存上候

中隊は去る五月中旬北支を出發前線に向ひ候も途中絶へず飲料水の不自由或は當地特有の黃塵の障害等幾多の艱苦を克服しつゝ、灼熱の炎天下を百数十里の行軍を續け徐州陥落後は隴海線に沿ひ敗敵を驅逐しつゝ、西進し居り候處六月一日早朝火食店附近に於て堅固なる陣地を構築し友軍を迎撃せんとする約一ヶ師の敵大部隊と遭遇し中隊は寡少なる兵力を以て之を攻撃し交戦十數時間に亘る激烈なる戰闘の後遂

に潰敗せしめ候この戦鬪に於て同君には敵と至近の距離に於て銃砲彈の雨飛炸裂する下に極めて勇敢沈着に行動しよく上官の指揮に従ひ攻撃前進中將に敵陣に突入之れを占領し續いて第二陣地に突入寸前(六月一日)午後五時五十分不幸にも頭部に敵彈を受け貫通銃創を以て遂に尊き犠牲と相成られし次第に御座候尙○隊長龜大尉殿山中殿他○の名の戦友を失ひ不肖徳雄中隊長代理として戦鬪せしも終始同君の旺盛なる士氣と果敢なる行動はよく友軍を有利に導きその壯烈なる最後に當ては 天皇陛下萬歳を絶叫せられ従容として死に就かれたるは寔に倒れて後止むの軍人精神を發揮せられしものにして崇高無比の御最後と申す可く吾等一同深く痛惜に堪へざる次第に御座候御遺族たる皆様の御心中を拜察致すにつけ惻々として無量の感に迫られ只々多數御英靈の冥福を祈上候既に御承知の通り支那軍閥も最後の關頭に立ち餘命幾許も無き狀勢に御座候得共徹底的に膺懲を加へ且つ多數御英靈を慰め奉る可く當隊も現在出動準備中に有之候再び第一線に立つ日も近かるべくその節は皆様の御負托に副ひ申す可く一層の御奉公を覺悟致居候蕪辭甚だ失禮には御座候へども右御詫び旁々御挨拶申上度如斯御座候尙末筆乍ら時節柄御自愛專一に御加養の程祈上候 敬具

昭和十三年七月二十五日

山中 宗治 殿

歩兵少尉 柏 倉 徳 雄

友山中頼太郎をおもふ

第三十回 福 田 正 雄

三月 一日

御手紙を頂いた時はだめだった。

あまり急なので失禮して申譯なし。遂々北支へ送られるらしい。三日から六日迄四時から六時迄麻布

三河臺町小學校で面會出來ます。其の節お會ひし度い。

駒崎にもよろしく云つて下さる。

一週間位で出發らしい。匆々

三月二十一日

拜啓其後皆様御變りなく御消光のこと、存じます。

陳者此度内地出發に際し数々の御厚情を蒙り有難く御禮申上げます。不肖幸にして第一線に立ち得るの光榮に浴し欣喜雀躍身命を賭して東洋平和の爲めに奮闘致す覺悟であります。御蔭様にて出發以來海陸共に悲なく身心共に元氣にて任地に到着致しましたから御安心下さる。

向後重き任務の爲乍不本意自然疎音勝ちなるを豫め御許し下さい。
折角御自愛を祈上げます。敬具

(型通りの挨拶状の後にペンの走り書きで)

誰にも會へさうにもない。而し平氣だ。このよい體驗を生かすつもりだ。竹中(竹中一郎——浦高柔道部先輩)新山(新山裕——浦高劍道部先輩)石田(石田秀文——浦中第三十一回卒業生)などが同じ中にゐるが中隊が分れてしまった。

三月二十八日

冠省遂々大宮公園花見シーズンとなりました。

其後元氣でおつとめと存じます。既に内地出發以來二週間以上も經ちあはた、しい生活も漸く慣れて來ました。當地へ来て高田らと會へると思つたら到底そんな機會はない。毎日教練と内務の爲めに色々考へるゆとりがありません。徹底的な我的團體生活です。そしてどれほど命令の大切なるかを知りません。而し如何にしてもこのいゝ經驗を必ず生かして見たいと思ひます。では又

一期の檢閲がすめば警備に出られる話を伺ひました。

四月五日

冠省 其後相不變の事と存じます。小生も元氣で新兵教育を受けてゐる。まだ當分は何も出来ない。

一人前に早くなり度い。高田は何處にゐるやら分らず。そのうち北京外出でも出來れば又何とか話が出来よう。それ迄は教練敬禮を他で元氣よく一日を送つてゐるだけだ。では又 匆々

四月三十日

御なつかしき便を頂きまして御返事を出すつもりでも却々ひまがなくて延引致しました。相不變御元氣な御話で遙に貴兄が明らかな姿を偲んでゐます。向島の花見の事などを思ひ出させられてなつかしき限

りです。僅に内地よりのたよりであこがれの故國の香を味ふ位ですからもうひまさへあれば思出にふけてゐます。又よく出來てゐて新兵さんにはそのひまさへもないのです。セルのシーズン、生ビールの甘味は土塵でかためた様な軍服と顔から鹽の取れる様な物凄い汗を流して頑張つてゐる自分にとつてはなんと遠い感じだ。

もう根本から勉強するつもりで一生懸命やつてゐます。銃劍術劍道も時々元氣よくやります。では又書きます。匆々

これが童心にかへつた山中からの手紙の全部だ。

三月一日應召

六月一日戦死

短い御奉公だつたがよくぞ花と散つてくれた。得難い友を失つたことは私情としては残念でならないが、又自分の近くから護國の神が出たことは誇りたくもある。

おもへば永いつきあひだつた。しかも山中、高田、駒崎と揃つたのだから何處へ出しても恥かしからぬ友として敢て自慢してもいいと思ふ。一乙の昔から共に喜びも悲しみも分け合つた仲だつた。恐らく無智な徒であつたら血でも啜り合つて義兄弟の契を結んだにちがひあるまい。けれど幾度となく酌み交した盃にはそれにも勝る何物か含まれてゐたと信じてゐる。多分に山中の氣持は我々の氣持の中に生きてゐる。

大事な大事な友のことだ。思へば思ふほどとめどなく思出はある。中でも東京港無言の凱旋には男泣

きに心で泣いた。六尺近い一代の快男子山中頼太郎が戦友の胸にだかれておとなしく白木の箱に收つてゐるにはこれがあの元氣で出て行つた山中かと胸のせまる思がした。出迎へる人としては駒崎と僕の外には縣の商工課の人が二人だけだつた。御両親が病の床に臥して居られ唯一人の姉さんが嫁ぎ先から秩父に歸つて家の方を始末してをられるために随分淋しい凱旋だつたが、高田出征してなきあとの二人の出迎には定めし喜んでくれたらうと思つてゐる。

拙い筆で山中を偲んでも結局は死者に鞭打つのがおちだ。唯心ある人に法學士山中頼太郎が北支寧陵縣の戦線で雄々しくも護國の鬼と化したことを思つてもらへれば幸である。

澄んだ初冬の大氣の中に秩父の連山が青く浮き出て見える。今その山ふところに父母に守られて安らかに眠つてゐるのが彼だ。

山中よ。お前はしあはせ者だぞ。太く短い一生は美しい限りだ。しかもお前は俺達の心の中に生きてゐる。お前を知るものは俺達を置いて外にない。だからお前の姉さんにかう言つたよ

『秩父のおとうさんおかあさんに言傳して下さい。どうそ氣を丈夫にもつてみて下さい。一人の息子は失つてもまだ浦和と大宮に息子達がゐるから。』と。

山中頼太郎君を憶ふ

第三十回 駒 崎 利 治

畏友故山中頼太郎君は今夏、六月一日北支寧陵縣附近の戦鬪に於て鬼神を泣かしむる壯烈なる戦死を

遂げられた。

武夫の常とは云ひ乍ら我々生前親しかつた者として彼をもつと長く生かしてお國の爲に盡さしめたかつたと思ふ。

身を捧げて護國の英靈と化すると云ふ國民としての最高の使命を果した彼に更に多きを希望するは誠に無理なことであらぬ愚痴とは考へるのであるが彼の將來に對する平常よりの期待が餘りに大きかつたが故に私個人としては悲憤遣る方無いのである。

御両親始め御一家の方々の御心情は想像に餘りあるものと思ふ。

同君は靈峰三峰山の麓秩父郡大瀧村の産で同地方きつての名望家山中家の長男として出生された。御父君は多年村の爲に其の長として盡された宗治翁であつて、同氏の御功績は今大瀧村役場の庭に聳ゆる山村には稀なる立派な胸像が之を物語つてゐる。

同君の御生家からは靈峰三峰の端麗な姿を間近に仰ぐことが出来又一丁と離れぬお宅の前には清澄なる荒川が磐をなして流れてゐる。誠に山紫水明の仙境である。同君は斯る環境の中に在つて實に素直に暢然と然も堅實に生長され、秩父町の小學校を経て浦和中學校に入學せられたのである。

中學に入るや忽ちにして其の鋭鋒を現はし特に語學に於ては級中及ぶ人がなかつた。他面劍道部及辯論部の團將として母校の名譽を双肩に擔ひ活躍され誠に青年らしい熱と意氣の好男子であつた。諸先輩を始め我々級友は等しく彼を仰いで將來の大人物として折紙をつけて居つた次第であつた。

彼の教室に於ける眞摯なる勉學の姿、劍道場に於ける特異なる構へと氣合、一と昔も前の事乍ら今尙眼前に彷彿として去らなす。

純真な中學時代の交友、之ぞ人生に於ける最も良き友を得る時代であり其の機會も他の時代に比し最も多いものと確信するのであるが幸にして私も田舎よりぼつと出て来て彼を始め他の優れた方々と御交際が出来た機會を得たことに對し身の幸福を泌々と味つたものである。

修學旅行に方々へ行つた事、軍事教練に於ける行軍、野營、運動會、試合、應援團の事など、又試験ともなれば下宿へ出掛けて一緒に色々な事を考へたり暗記したりした事等々誰でもが經驗する普通の事ではあるが今や亡き彼を考へると今更乍ら其の頃の事が走馬燈の様に私の頭の中を往復して拙い筆は遅々として進まない。

昭和四年中學校を出て其の年彼は浦和高校の文甲に入り私は同校の理甲に入る事が出来た。

高校時代も同君の人格の然らしむるか忽ち級を牛耳る様に成り他面中學時代からの劍道に精進した。

文科と理科と分れてはゐたが私は中學時代と同じく極く親しく交はつて戴くことが出来た。

朝はよく彼の稅務署附近の下宿先を訪れ懐かしい浦中を左手に眺め乍ら人生を論じ、藝術を論じ、社會を論じ、然も我々の將來の進むべき道について彼から種々の事を教はつたものだつた。又時に男と女の問題について話し合つた事は勿論である。

若き夢多き時代も私は幸にして同君と共に在つた。

昭和七年大學へ入つた、彼は法科、私は工科だつた。餘りに几帳面な實利的な工科の學問をしてゐると何となく社會一般から離れてゆく様な氣がしてならないので、私は務めて隙を作つては同君の赤門前の下宿を訪れ彼から種々の知識並に意見を吸入するに努めた。

高田、福田、小沼、田中等の級友と共に實に屢々會合を催しお互に意見を交換し親睦を加へた。相共

に立つて將來は屹度何等かの方面で國家の爲に盡さうと云ふ我々の信念は熾烈なものであつた。餘興には彼は何處で覺えたかと思ふ歌や踊を我々の前で披露して我々を啞然たらしめたものだつた。

然し大學時代の彼は彼の眞面目な性格に依り人生問題に關し實に深酷な惱みを體驗した様であつた。其正體など愚鈍な私には想像も及ばないのであるが高田、福田等と共に友人としては何等か力に成り度いと考へながら誠に無力な助言しか出来なかつたのは實に遺憾であつた。然し我々の仲間の集ひに出て来て彼は何時も元氣で口癖の如く中學校時代の友達は實に心の故郷だと云つてくれてゐたのはせめてもと考へてゐる。蓋し彼自身彼の惱みは自分で解決すると云ふ斷乎たる方針に出たが故であつて我々友人が強ち無力であつたのみとも考へない。

昭和十一年に大學を出てからは埼玉縣廳に奉職し經濟部商工課に在つて産業組合の指導監督等の仕事をして居られた。多少其の仕事は彼にとつて役不足とも感ぜられたが仕事を進めるにつれて興味を増し彼獨得の指導精神に依つて部長課長にも意見具申を爲し着々其の効果を擧げて來たのであつた。私も商工省へ奉職する様に成つたのでお互に役所勤めの仕事は身にしみて應へてゐるので日本の行政機構の不合理、革新政策の進むべき道等についても機會ある度に語り合つたのである。彼は何時も「お前は技術家ではあるが官廳技術家が從來の如き勤め方では國家のお役に立つことが尠い、須く眼を大局に向けよ」と云つた。

彼自身些々たる縣の一吏員として働いてゐたのではあつたが夙に將來議政壇上の人を目指し進みつゝあり其の時に對して自己の研鑽を積んでゐたのである。

支那事變の最中二月の末同君に召集令は下り、五尺八寸二十貫に及ぶ巨軀を戎衣に包んで意氣軒昂名

譽の歩兵 等兵として勇躍出征したのである。

麻布六本木小學校に福田と一緒に出会った時の童顔二十歳の若さに還つた彼の顔は寧ろ可愛さへ感ぜられたのであつたが数日後の三月十日品川驛を歡呼の聲に送られて出た時の祝ひ酒に頬を紅潮した彼の姿は實に颯爽たるものであつた。其は冷い露の降りしきる寒い朝であつた。

彼地で三ヶ月間教育を受けて第一線に配屬せられ、徐州攻撃の一翼として北支寧陵縣に於て壯烈無比天皇陛下萬歳を絶叫しつゝ、名譽の戦死を遂げらるゝ迄、或は野に伏し山に寝ね苦勞の數々を積まれたことは同君遺品の日記帖に依り明らかである。

同君の英靈は八月十日御用船〇〇丸に依り芝浦港に無言の凱旋をなされた。心の友として將又銃後國民の一員として彼の爲に深き感謝追悼の意を捧げる次第である。今や私は——級友と共に——彼を失ひ人生の指導標を失つた氣がしてならない。

私等としてはせめて騫馬に鞭つて専心御奉公の誠を致すと共に年老いてたつた一人の御子息を失はれた御兩親に對し亡き彼の代りとしてせめて時折慰問の微意を捧げたい。

金子清君

君は明治四十四年八月二十日北足立郡六辻町白幡、金子清一郎氏の三男として生る。六辻小學校を経て男子師範學校附屬小學校に學ぶ。君は學業成績常に優秀にして、級中の模範生であり、級長となるこ

と數回。大正十四年四月浦和中學校に入學。温順にしてよく同情に富む君の性質は、益々發揮されて、

級友一同の深く敬愛するところとなる。君のこの美德は家庭に於てもよく現れてあます處がなかつた。

君が中學卒業の年、君の長兄は入營軍務に服してゐた。そのため、君は手不足の商家にあつて、直ちに制服を印絆纏に着替へた。かくて一年間、君は御華客の門に立つて御用を聞き、註文の品を配り、夜は夜で帳面付に夜の更くるのも知らなかつた程であつた。

翌年三月、君の祖母君の重病に臥するや、不眠不休のその看護振りは誠に人をして泣かしめるものがあつた。

同年四月第二早稻田高等學院に入學。昭和十二年三月、大學部商學部を卒業。直ちに東京電氣株式會社に入社。本社經理部計算課勤務となる。圓滿なる性格はよく上下の信頼を聚む。年末決算期に於いては、君の精勵振りは、日毎に殆ど徹夜に近く、幾度か終電車に乗り遅れては會社の宿直室に寝たのであつた。その爲か、君の健康は稍衰へ、君の頬には、幾分憔悴の色が窺はれた。かくて文字通り社務に盡瘁すること數ヶ月。

十三年三月一日、君は補充兵として應召の命に接した。三月五日、君は日本青年會館を訪れた妹君に次のやうに書いて渡した。身は何處にあるとも自己の本分は果す」と。これこそ眞に君の本領を發揮したものである。留まること數日。北支某方面に出征した。此地で訓練を受けること數ヶ月。以下君の通信によつて、君の戦線生活を偲ぶこととする。

こちらは早や暑くなつて居ります。内地の六月終り頃の陽氣でせう。三月の終り櫻が咲きました。今

柳に新芽が吹いて、灰色の風景に緑を興へてゐます。新兵生活早や一月餘り、午前午後の演習に飯がうまくなりました。間食といつて、菓子、果物は毎日、或は一日一箇の煙草も渡ります。酒も二三日おきに渡ります。今日は土曜です。午後の演習が無かつた爲、夕食前の一時を利用しました。今晚、勝太郎一行の演藝會があります。(四月九日)

かくして七月一日附の書信には

現在の任務は或驛附近の警備旁々討伐隊となつて居ります。その名の通り盛に討伐に出動致しますが手ごたへのある奴も居りません。勤務以外は至つてのん氣に送つて居ります。

更に七月十五日附の君の便りに

去る七月七日は事變の丁度一週年に當り、當地方は非常警備をつゞけて居りましたが、七日も無事に終つたと思ふ八日の午前五時半、突然西の城内の方に當つて拳銃の音が聞え、匪賊襲撃となりました。この驛から城内迄丁度二軒位の距り、その町は城壁でとり圍まれてゐて、東西南北に關門があります。城内の人口約二萬位、その四つの城門を匪賊が攻撃してゐるのです。中にハンゴを持つて城壁をのぼらんとしてゐるのもゐるとか、城内から驛に電話がありました。自分達は丁度この驛の衛兵について居りました。彈丸は飛んで來ず、匪賊は専ら城内をねらつてゐるやうでした。そのうち驛のすぐ傍へ迫撃砲の凄いやつがドカンと破裂しました。三發四發、一同トーチカや土囊のかげに身をひそめましたが、敵は驛を牽制したものでせう。そのうち「城内から匪賊退かぬ、驛より威嚇的射撃頼む」と云はれ、銃を据え、バリ／＼撃ち出し、やつと敵は鳴りを静めた。そのうち大隊本部から應援隊が來り、折から夢中になつて西門を攻撃してゐた匪賊の背後へまはり、突撃して敵三十を殺し、鹵獲品多數を得ました。事變

記念日もかくして無事に過ぎましたが、其後も狀況悪しく警備の手をゆるめられませんでした。今日は十五日。今宵は素晴らしい月夜。煌々と輝く月光を浴びてゐます。大移動があと數日であります。どこに行きましても必ず御期待に背くやうな事は致しません。此度は或は目覺しい手柄話を御通知出来るかも知れません。では御氣嫌よう。

七月、君は北支より南支へ移駐を命ぜられ、本間部隊長谷川部隊佐々木隊に編入となる。

八月十五日、南京よりの便り——北支を出發して航路恙なく揚子江を遡行して、只今中支の或大都會に寓して居ります。到るところ爆撃され、慘狀を呈してゐます。日本軍入城以來八ヶ月、その當時の激戦の様子があり／＼目に浮びます。日本軍人が町にあふれ、我國の力強さを思はせます。又やがて此の地を出發、目的地向ひます。

かくて九月八日附の葉書が最後のものとなつた。曰く

御無沙汰致して居りました。只今更に揚子江を遡行した奥地、後に有名な廬山を負ひ、遙かに湖水を望む景勝の地に居ります。日中は暑さ酷しくも夜間はさすが涼風吹き過もしきりに鳴いて居ります。近日此の地も出發致します。遺憾なく働きます。皆様によろしく。

江南の戦況漸く酷にして、君の屬する長谷川部隊は江南の野に轉戦數合、遂に君は十月二十日陽新縣張家山南側高地の激戦にて「遺憾なく君の働き振り」を發揮して、こゝに名譽の戦死を遂げたのである。

前途猶有爲の身を以て護國の鬼と化す。洵に悼惜の情に堪へざる次第である。君としてはこの世に生を

享けてこゝに二十八年。その一生は誠に眞心を以て貫ぬかれた生涯であつた。
君戦死の日伍長に昇進。

生前昵懇なりし君の同窓島根光君の追悼文を得て次に掲ぐ。

金子清君の靈に捧ぐ

第三十一回 島 根 光

生を皇國に享けたる者、一死盡忠、以て護國の神となるはもとより本懐とするところなり。
君、十月二十日、陽新縣張家山南側高地に於て壯烈なる戦死を遂げらる。其の名譽亦輝かしい哉。
懐ふに君は性質溫和にして、友情に厚く、事を爲すに誠ならざるなし。其の級友と交るや「ねこさん」として親交せられ、級友の病缺するや遠近を問はず見舞を怠らずして一同を感激せしめしこと少なからず。其の勉學に没頭するや、寢食を忘れ、家人に注意を受けて氣付きしこと再三に止らず、かくしてその長ずるところの文學方面に益々才を表し、文藝部の委員にまで選ばれる。中學を終へて、早稻田の高等學院及び經濟學部に學ぶに及び、その才能はいよ／＼光彩を放ち、拔群の成績にて昭和十二年三月卒業する間もなく東京電氣株式會社社員となり、經濟部計算課に勤務さる。こゝに於て君が英邁なる天資と、多年鍊磨の學識とは遺憾なく發揮せられ、課長を初め同僚の驚異するところとなる。而して、その職務に熱意あること尋常ならず、歸宅は毎夜三更を過ぐ、是に於て御嚴父の心配、一方ならず、再三、再四、

轉任若しくは轉職をすゝむれど「轉任は、孝養に不便なる故」又「轉職は、將來性ある職なる故やめず」と肯ぜず、かゝる努力をすること略一年、その生活にもや、慣れしを以て、御嚴父も安心致され居りし折三月十日恐れ多くも、天皇陛下の御召にあづかり勇躍して征途に上る、その出發に際し、家人をさとしはげまして後、御嚴父に對し「會社よりの俸給は父上の保養旅行等に全部當て給へ、戦地では金は少しもいらんから」と、將に征途に上らんとして、老い行く嚴父の身を案じたる君が心は、正に忠孝兩全の道を全うしたるものと言ふべし。

それより君は未だ經驗せざる軍隊生活に入らる。如何ばかり苦心の多かりしことか、然も君は生來の面目をこゝにても一層發揮し、事として上達せざるなく、短日月の間にその業大いに進むと。

間もなく、中支派遣軍本間部隊氣付、長谷川部隊、佐々木隊に屬し、中支の各地に轉戦又轉戦赫々たる戦功を立てらる。その戦鬪の勇猛果敢なること他の模範たりと、かゝるが故に、補充兵より早くも上等兵に昇進し、幹部候補生にまであげらる。君の前途や輝かし、君の努力や尊し。

悪戦苦闘夜を日に次ぐ中にありて、少憩を得れば家郷の父上を案じて、その安否を尋ね、狀況を報知す、その一文に曰く

「御無沙汰致しました。只今揚子江を更にさかのぼり八月初めに占領した有名な○山の麓の山村に来て居ります。此の山は高い岩山で、又遠く湖水が見られて、とても景色のよい所です。日光を思ひ出したり、箱根を思つたり、今迄自分の行つた所を追懐して居ります。陽が昇る時や、夕陽が沈む景色は又格別です。殊に昨今は月が良く煌々と冴え渡る月光が、此の○山の岩肌を照す時、何とも言へぬ神々しさに打たれます。近日此の地も出發致します。體は何の故障もなく、益々元氣ですから何卒御

安心下さい。これからも出来るだけお便り致す考へですが、連絡があるかどうかきつと御無汰沙勝となるでせう。内地からの便りも慰問も手に入りません。此所へ来て一回受取つただけです。澤山たまつてゐると思ふと待ち通しいです。家の者皆變りない由安心致しました。叔母さんも御元氣との事何よりと存じます。美千枝(めひ)も元氣でせう。壽(弟)からまだ凱旋の様子の通知がありませんか、今歸れば内地でも就職は樂と思ひます。滿佐江(妹)が家事を充分やる様言つて下さい。それから裁縫でも専門に習はせたらどうでせう。尙つとめて外へ出る様父上からも言つて下さい。何かと忙しく親せきへはお便り出来ません。どうか家からよろしく願ひます。では皆様御きげんよく、殘暑酷しいと思ひますから御自愛の程を。

九月八日

父上様

清

と、その肺肝よりほどばしりて家族を思へるの情は、幼児の遊事より、妹の將來にまで及び、叔父とし兄とし、子とし、弟としての責務を全うせるなり。

計らざりき、この一文が絶筆となり變らうとは!! その後は戦友の報告なく、新聞の報するなく、た、簡單なる公報ありたるのみ。

待つらくは君が最後の奮戦の詳報を。

然しながら詳報はなくとも、君が最後は、必ずや奮然として敵陣に突入し、縦横無盡に切りまくり武人としてあつげられる最後を飾れるならん。

君が最後の萬歳に對へて、吾も君が花々しき最後をたへつゝ萬歳を唱へむ。(十二月七日配)

榎本勝治君

君は、大正四年十一月二十六日榎本友治氏の長男として、浦和市太田窪に生れた。ついで浦和市第四小學校に入學したが在學四年にて埼玉縣女子師範學校附屬小學校に轉じ昭和三年同校を卒業し、本校の第一學年生となつた。

其の風貌清秀見るからに優しく、教室に在つてはむしろ溫良過ぎるかに見えた君も、運動場に出ると別人の觀があつた。陸上競技部選手としての奮闘振を見れば、あの身體の何處からあれだけの意氣が出るかと疑はれる程であつた。舊校舍の櫻樹の砂場で、三段跳に市跳に活躍してゐた君の姿が今尙眼前に浮んで来る。

昭和八年三月第三十四回生として卒業するや、暫く本校補習科に在學した事もあつたが、やがて軍務に服し幹部候補生となり、陸軍歩兵少尉に任ぜられた。

歸郷後は父上を助け家業に精勵する傍ら、或は埼玉工業會社青年學校の教官として、或は浦和第四青年學校教官として熱心に後進の指導に當つた。今次事變の勃發するや、召集を受け本年八月二十九日麻布歩兵第三聯隊に入隊した。原隊に在ること數旬、九月十八日午後三時東京驛發勇躍征途につき九月二十五日南京着即日南京を發し津田部隊原隊に入り敵が難攻不落を誇る廬山の攻略にあつた。十月二日最前線に在つて奮戦中、第一小隊長戦死せらるゝや直に代つて其の任に就いた。君は終始陣頭に在り、雨と飛び来る敵彈を冒し泥濘膝を没する水田を猛進を續けたが、不幸敵の迫撃砲彈は君の側に炸裂無念

にも腿部に重傷を負ひ、後送せらるゝの止むなきに至つた。其後〇〇野戦病院にて療養中、十月十五日容態俄に變り、天皇陛下萬歳を叫んで瞑目した。享年二十四歳。謹んで君の冥福を祈る。

榎本君の戦死

第三十四回 染谷喜興 司

十一月上旬だつた。在郷軍人分會の人から、榎本さんが亡くなつたことをちらつと聞きましたが、知つて居りますか？と云はれて、豫期だにしなかつたことに、眞暗な穴の中にでも不意に落された様な気がした。前に新聞には腿と手を負傷したと云ふことは出てゐたが、様子を家の人からも聞いて死ぬ程のことは無いとのことで早速榎本君の家へ電話をかけて見ると矢張り眞實だつた。

どうして死んぢまつたんだ。あれ程元氣な君ではなかつたか、俺の兵隊友達にはもう應召されてるものがあるのに、どうして俺にはこないのかと云つて居たが、八月末に遂に召集令が来た。あの時の君の嬉しさうな顔、ニコ／＼しながら家に來たつて、出征の朝は同窓生多數に見送られ、見送りの人々への挨拶「大した働きは出来ませんが、出征した上は出来るだけの事をやる積りです。終り！」と、あんな立派な挨拶は聞いたことは無い。軍人精神そのものだ、飾りも何もありやしない、其の言葉が未だ耳にこびりついて離れない、何んて頼もしい姿だつたことよ。君はほんとに死んだのか？ 然し看護兵福田某氏からの手紙はあるし、最早あきらめるより仕方ないのか。

九月十八日午後三時特急富士號で出發の時、同窓生では小泉君、新井(康久)君、野口君と自分の四人だつた。あの時のホームの賑やかさ、「萬歳！」「萬歳！」榎本少尉殿萬歳！」その度に君はニコ／＼と挨拶して居た。然しほんのちよつと、それも、ほんのわづか、君の腫のちらつと濡れたのを自分は見逃がさなかつたよ。自分も思はずあの時は胸がつかつた。以心傳心。果して神はあの時永久の別れを我等にじめしたのであらうか？ 漢口攻略の眞最中毎日の様に新聞に出てゐたあの津田部隊の將校の補缺に君は應召されたのだ。顔中鬚だらけのおちさん連中の眞中に飛び込んで未だ少しも砲煙彈雨の中をくつたことの無いものが、部隊の指揮をとる、随分やりにくかつたらう。攻撃精神充溢せる君のこと故、そのやりにくさを精神力で押し通して、部隊の眞先に立つて、あの二尺二寸もある日本刀を振りかざし敵陣に切り込んだことだらう。無念にも敵の砲弾は大腿部及び左親指に間違つて當つてしまつた。後方の野戦病院に送られても心はどんなにか、陣頭に馳せてゐたことか、けれど死ぬ眞際、看護兵に「自分は立派に戦死したと云つて呉れ。」と最早總べてをあきらめた時の氣持、自分にはそれがたまたぬ程身に泌み入るのだ。生前の君(生前と云はねばならぬ様になつたのが残念だが)は全く素直だつた。おとなしいの一語に盡きる。女子附屬から浦中卒業までいや卒業後も、おそろく自分の知つてゐる間にたつた一度だつて人に對して嫌味を云ふとか怒ると云ふ様なことは無かつた。いつもニコ／＼してゐて、それこそ明かだつた。

運動は随分好きだつた。小學校の時も競走は何時とも一番だつた。誇ることも無ければ唯黙々と運動に楽しんで居た。卒業後も谷田の青年團でよく活躍して居た。全く明らかな君だつた。

家は機業なので綿の配給統制になつた頃、自分の家に來てはよく仕事やりにくいと云つて居た。而

もニコ／＼顔で、口ではやりにくいと言つても、あのニコ／＼顔のうちには、それを切りまわすだけの決心の程がうかゞはれた。

君がもし無事に歸つたなら機業に於てもおそらく何物かを成し得たであらうことを信じて疑はぬ。唯君の再び歸らぬのが残念でたまらぬ。

幸ひ君の家の人達は皆元氣だ。お父さん等随分落膽されたことであらうが、小泉君、相川君との三人で焼香に伺つた時、君の立派な死に満足してか、とても元氣だつた。榎本君よ、例へ身體は亡くとも、あのニコ／＼顔の靈で家の人達を慰めてあげて呉れ、君の靈は、それ程たよりになるのだ。

暫し瞑せよと云ひたいが、君の英姿があまりに近く眼前にあつて「おいどうした？」と話したくつて、それも出来ぬ程だ。

あまり、ぐちめいたことばかり云つて済まぬ。

今は護國の鬼と化した、榎本勝治君の御冥福を祈りつゝ、擱筆する。(昭和十三年十二月七日記)

「よう／＼しばらく」全く久しぶりだね、時に任官したそうだが、お目出度う「いや／＼どうも」先づはり／＼の青年將校と言ふ處だなあ、處で大丈夫かい召集の方は？「いや／＼と待つてゐるんだがね、君の方は」僕かい第一補充なんだけれど危い處さ「今日は何人位集まるだらうか、皆んなとも卒業以來すつかり御無沙汰してゐたからなあ」色々の事情で僕が榎本君と卒業以來初めて會つたのが浦和驛のホームでした。ちようど「三四會」の第一回の會合の日で、かなり暑い日だつたと思ふ。榎本君は白ズボン、ノーハットのスマートなスタイルで、あの愛嬌のある顔をにこ／＼させながらとても元氣だつた。

つた。

大官の會も紅露先生、尾崎先生、藤井先生を迎へて有意義にそして愉快に一夜を過ぐす事が出来た。さぞ榎本君も舊友と思ひ出話に耽つた事だらう。歸りがけにこんな事を語り合つたものだ。どうせ召集があれば僕なんか野戦小隊長だから最先に進め／＼とやらなければならぬさ……「全く大變な事だね……」其後幾何も無くして應召し、そして名譽の戦死をしようとは神ならぬ身の何を知らうぞ。當日の記念寫眞に僕の肩に手をのせたあの榎本君の顔をまさ／＼と思ひ出します。その晩十時過ぎ浦和に來てから染谷君の家で二人が御馳走になつた時、色々の話の中で「僕は身體には自信があるよ……」と言つてゐた。それが程在學中は運動が大好きだつた。立派なスポーツマンだつた。

八月廿九日 應召の日舊友が大勢見送つてくれた。その日の凜々しい軍装こそ何處から見ても立派な青年將校だつた。驛前とホームで撮影した寫眞が今は思ひ出となつてしまつたのだ。いよ／＼急に明日東京を出發戦地に向ふと言ふ日正午頃染谷君の家へ呼ばれて榎本君と三人で御別れの御馳走を戴いた時「生魚は身體にさわると困るからなあ」と心配してゐた。非常に忙しいので幾何も話す事なく別れてしまつた。「では元氣でやつて呉れよ！」身體に氣をつけてなあ！「その時」では行つて参ります。もう歸りませんから……」と言つた言葉が今でもはつきり耳の底に残つてゐる。戦場に行く者の常とは言へ、餘りにも早い現實の姿に感慨無量である。

翌日東京驛で染谷君を始め舊友と萬歳の聲と軍歌の中に送つた時だ。浦和を出るのが少し遅れた爲驛は見送人で一杯でなか／＼榎本君を見付ける事が出来ずやつとの思ひで列車内に居るのに會へた。皆思ひ／＼の饒別をあげた。自分の事を書くのも變だが僕も心許りの藥品を少々包んだ紙包を人手を借りて

やつと手渡す事が出来たが萬歳／＼の聲に遮られて、その説明が出来ない。仕方がないので、手まねで飲むまねをして大聲で「薬だよ！」と叫んだら、どうやら分つたと見えてにつこり笑つて頷いてくれた。その時の顔……唯々もしもの時に少しでも役に立つたらと思つただけでも……残念な事でした。翌々日〇〇からの元氣な便りを戴いたのが最後でした。

其後毎日のラヂオニュースや新聞記事に又ニュース映畫に心躍らせて榎本君の奮闘を心から期待してゐた。今や徳安戦線は激戦々の最中だつた。もう榎本君もやつとるぞと思つてゐる時榎本君負傷の事を突然聞かされた。餘りに早い負傷の報せにその愕きとくやしさ……せめてもう少し戦はせたかつたと思ふ事は御両親を始め誰も同じ事だつたと思ふ。然し負傷の程度から言へば残念だがこれ以内地に後送される事と思つてゐた。當時の當番兵(福田正治氏)から御両親への十月四日發の手紙には次の様な事が書かれてゐた。

「冠省小生未だ拜眉を得ませず御子息勝治殿去る二日の戦闘にて攻撃前進中名譽の戦傷を爲され當番として快方に向はれる迄世話致す事に相成りました。就きましては戦傷の程度は左大腿部の貫通銃創と左手首の小銃破裂傷の二ヶ所にて今日の経過は良好にて一時出血も多量なりしも生命には別段異状ありませんから御安心下さい。尙左手首の傷は親指は骨をやられた爲止むなくそれ一本丈切斷しました。只今は第一線より五里ばかり後方の病院に居ますが何れ他の病院へ後送される事と存じます……(以下略)」とありこれを見て御両親もさぞかし御心配の中にも幾分か御安心なまつた事と存じます。それなのにあゝ！天は何んと言ふ無情な事か十月十八日發の手紙に榎本君の戦死を報じて來たのだ。出血多量の爲か足にむくみを生じ十五日に切斷手術施行の止むなきに至り手術後一時間半程にて遂に眠るが如く此世を

去られたと言ふ事です。手紙の中に「……その爲遺言も聞かず誠に申譯なく今思へば負傷して野戦病院に一夜を明かした節、俺は駄目だ此處で死ぬよ、家へ歸つたら立派に戦死したと言つて呉れよ」と言はれたが當時はこんな状態に至るとは想像もせぬ爲氣にも止めて居りません、そんな事はない、立派に癒せるから氣を大きく持つて下さいと再々言ひましたが、今になりその言葉が思ひ出されます……」と當時の様子を細々と報じて居りました。これを見て御両親を始め御兄弟の嘆き如何ばりや察するに餘りありません。

幸ひ當時の戦友加藤少尉殿から生々しい當時の戦闘の様子を傳へて來た御手紙を拜見させて戴き代つて皆様に御報告致します。

「……十月二日この日はよく晴れた秋晴の一日でした。朝から秀峯廬山一帯に對し猛烈なる砲兵の射撃がはれ壯觀を極めて居りました。榎本君の中隊はこの日第一線即ち一番敵に近く居る中隊でした。午前十一時半同中隊の第一小隊長として自分は猛烈なる銃砲火をおかして一意敵陣に向つて突進しました。丁度其の時榎本君は指揮班で中隊長と一所に活躍してゐました。恐らくこの日の戦闘こそ廬山戦闘中最も激烈なる戦であつたでせう。小銃弾機銃弾は絶え間なく加ふるに敵の迫撃砲弾さへ來るのです。敵は堅固なトーチカ陣地によつて弾のある限りを撃つてゐるのです。一進一止敵陣に近づきました。あと一息と言ふ處で自分は敵陣にあたり倒れました。この時第一小隊長の交替として榎本君は中隊長の位置から卒先第一小隊の方向に走つて參りました。敵は日本軍の將校に向つて特に狙撃するのです。水増した水田に雨のやうに落ちる弾雨(これこそ本當の弾雨でせう)をおかして前進する少尉の姿は不動の像の如く唯々愛國の一途盡忠の權化でした。支那軍の射撃は不正確です。而し如何に

不正確でも数多き弾ですからたまりません。少尉はとう／＼敵弾にあたつて倒れました。榎本少尉もやられた。兵の聲に倒れた自分は驚きました。

其後苦戦を重ねて翌日この地に日章旗を立てました。自分は十時間倒れたまゝ、榎本君の事や兵の事を氣づかつてゐました……。」

何んと言ふ勇ましい情景ではないか、思はず自分等も飛び出したい氣で一杯になつて来る。せめて徳安迄もやらせたかつたなあ……。」

今は亡き榎本君の遺骨の一刻も早く歸る事を心待ちに待つてゐる時、あの廣い／＼戰場で榎本君の魂が、共に戦線で活躍してゐた親友關口登君(鳥海部隊)(三四回會員)を呼び止めた不思議なお話があるのです。關口君の心になつてどうか此の便りをお読み下さい。

(十一月九日發) 拜啓漸く向寒の砌り御高堂皆々様益々御清祥の事と存じます。永らくの御無音に打過ぎてゐる申勝治君は出征なされ惜別の涙も乾かぬ中に此度は名譽の戦死をなされ御家族の御哀みは如何許りかと察するに餘りありません。戦に立つそれも華々しい青年將校としての出征に就いてはさぞ御覺悟も有之とは存じますもの、我々も同様明日にも知らぬ露の如き命乍ら親友の一人として一人涙に暮るゝのであります。今十一月九日計らずも當中隊糧秣受領の爲〇〇交付所に午前十一時頃自轉車にて行かんとした處丁度當隊から道路に出る三角點の處にて轎馬を一車輛輓ける二人の兵隊に會ひました。勿論それとは知らず車輛の上を目を通しますと塔婆の様なものが故陸軍歩兵中尉榎……と迄目に入りました。勿論よもや勝治君では？遠つてゐたらいゝが……といふ瞬間的に頭の中で問答し直ぐに自轉車でその車輛を追つて前から見直しました。と驚いたのは杞憂は現實となつて私の胸を打つた、め

「一寸その馬待つた」とその馬を止めたのです。勿論馬について来た二人の兵隊(一人は歩兵上等兵、一人は特務兵)も突然のこの私の舉動に驚いた爲直ぐに馬を止めてしばし自分を見つめてゐました。やがて我にかへつて見れば塔婆と想はれたのは「故陸軍歩兵中尉榎本勝治遺品軍刀一口」といふ軍刀を入れた箱でした。心臓のどよめき！附添の上等兵の人と語る事も出来ず靜かに冥福を祈りながらあまりに早き變り方に残念の涙が流れました。双方共に任務を帯びて反對の方向に行かねばならぬ處事情を話せば先の上等兵の方もよく分られてわざ／＼遺骨迄出してくれ白布に包まれた勝治君を抱き本當に胸が一杯になりました。何んたるひき合せぞ！「君の靈は俺を呼んでくれたのか」と喜んでくれ君の分迄奉公するからと語らざる中に誓ひました。本當に只偶然とは思ひません。あとの話ですが昨夜はどうしても安眠が出来ませんでした。何かうなされる様で、出征當時、榎本君が品川驛迄来てくれた顔も確かに夢枕に見たと思ひます。何とはなしに手足がだるくたつた一枚の毛布すら重い様に感じたのでした。やはり之が豫感だつたと不思議な靈の存在、勝治君が小生を親友の一人としてゐてくれた事を深く喜びました。その上等兵の方の話では最も堅壘を誇つた隘口街の手前の山で自ら進んで立たれた陣頭にて武運拙なく敵弾に手首と足の太腿とをやられたのだそうです。その後〇〇野戦病院にて手當の効もなく遂に戦傷死なされた由かへす／＼もせめて徳安を陥すまでもとやはり涙ぐんで居られました。晩秋の陽は燦として輝き惜別の情耐え難く今遺骸に會へて永遠に又會へぬかと思ふと聯隊本部に歸る靈をしばし見送り萬感胸に迫りてはりさげん許りでした。その上等兵の方の名も問はずあとでしまつたと思ひましたが、唯自分の部隊名と故人の親友の一人である事を記せる紙片を何かの役にと渡して置きました……。」

何んと言ふ崇高な場面であつたらうか、何んと言ふ尊い友情ではないか、どんなに榎本君の魂が共に會ひたかつた事か、その魂はあの廣い／＼戰場を尋ね／＼て遂々關口君に會へたのだ。これが眞實なのだ。銃後の皆様この事實を何んとお考へになるか、幾多の英靈はあの支那の大陸をそして故國の空をかけてゐるのだ。此の魂が靖國の御社に靜かに眠る事が出来るのも一に今後の我々の雙肩にあるのだ。東洋永遠の平和が達成された時こそ、地下でいつこりほゝえんでゐる事であらう。前途尙ほ多難、一層奮勵努力一致協力して此の國難を突破せずにはおかないのだ。

此追悼文を書くに當つて色々御協力下さた榎本君の御兩親を始め、種々の資材になつた加藤少尉殿、關田正治殿、關口登君等の御手紙に對し心から感謝致します。

榎本君の家へ御伺ひした時、白い仔犬がじやれて／＼仕様がなかつた。とても可愛らしい仔犬だつた。犬だもの何も知らないだらうに……然し何かしら胸の熱くなるのを感じた。その歸途榎本君が在學當時毎日／＼通つたであらう、あの坂道に出た時、西の夕焼が空に富士の靈峰が大きく紫色に霞んで見えた

(十三、十二、十記)

第三十四回

小 泉 勝 彦

勝治君暫く振りで會つた今日が最初にして最後とは何たる情ないことか、武人の常とは云へ關口は變り果てた君を抱き上げて男泣きに泣いたぞ。俺は決して偶然に會つたとは思はん。必ずや君の靈が俺を呼んだのに違ひない。

君が八月下旬に麻布に召集になつたことは野口君から聞いてゐた。任官して青年將校としての腕を撫

し軍刀を帯びて脾肉の曠に暮れてゐた君はどんなに喜んだことか想像して俺も特務兵乍ら肩身廣く思つてゐた處なのだ。その通知を受けて一ヶ月も経つか経たぬ内に今日の姿とは？ 白布に包まれた君をしつかと抱きて青春の血潮は急に逆流した。色々の思出が走馬燈の様に走つては去り去つては來り、とめどなく涙が出た。行李に書かれた榎本の字にも君らしい筆使ひを今更乍らなつかしく見た。

君はその名も高き津田部隊の小隊長として最も地の利を占める敵の陣地隘口街の激戦で名譽の負傷を手と足に負ふたとか、唯野口君からは足に輕傷を負ひたるも元氣なりとの情報に又一線に叱咤する君の英姿を想ひ浮べて唯々長久を祈つてゐたが神ならぬ身の何でその傷がもとで切斷の止むなきに至り遂に星子野戰病院にて戦傷死せるとは……………

今は唯君の冥福を祈るのみ！ 感慨無量！

靈よ安らかに眠れ！ 大陸躍進日本の尊き礎とちりたる君よ敵の牙城武漢は陥ちたるも前進尙多端、泉下で聲援あれ、感極まりて書くを得ず。變り果てた姿に錦飾りて父母に見えた勝治君！ 永へに安らかに眠り給へ！

尙君を案内せし伍長の人も徳安城に日章旗掲げた後殉死したことを聞いた。はやる心唯々あせるのみにて思ふことも書けず君の靈に捧ぐ。

昭和十三年十一月九日夜

第三十四回卒業生

關

口

登

記

以上の追悼記事編輯に就きましては、御遺族の方々には御取込み中にも抱らす種々の材料を御提供下され感謝に堪へません。甚だ勝手乍ら編輯の都合も御座いましたので、戴きました材料を取捨した點も多く御座いますが何卒御諒承下さい。

尙追悼文御執筆の會員諸君にも右様の事情何卒御諒察下さい。

材料の蒐集に當りましては當方の努力不十分の爲、記事に多少の長短が御座いますがこの點御遺族の方々には御詫び申し上げます。

猶本「思ひ出」編輯後、突如として佐久間吉夫君(第三十二回卒業生)の訃報に接しました。同君は江南戦線にて負傷、上海を経て内地に後送、爾來東京陸軍第二病院にて療養、經過良好のところ、計らずも十二月十四日死去せられました。哀悼に堪えません。なほ同君追憶の記事は間に合ひ兼ねましたので次號に譲ります。

左に出征會員の氏名を掲載致しました。或は調査不十分の爲、記載もれの方もあること存じますから其節には至急御一報下さいます様御願ひ申し上げます。

出征會員氏名

特別會員 齋藤二郎 内田義春 稲見克己 中村三藏

瀧田元吉 西川五市

正會員

第一回 松永信敬

第二回 柳下重治

第五回 野口茂樹

第一〇回 山本恭平

第一一回 稻見克己

第二二回 吉澤照次

第三三回 篠田省三(戦死)

第一五回 名古屋喜代造

第二一回 齋藤忠康

第二二回 白鳥正次

第二三回 大熊充哉

高野孫二郎

中田茂

吉野松五郎

鳥海修平

古橋才次郎

松本永世

金子揆一

金森有吉

小泉正男

川鍋石雄

小谷野孝(戦死)

第三回	伊藤泰介	飯塚孝司	小泉勝治	白倉米次郎
第二四回	柿沼三郎	野本正雄	吉岡好治	藤田宣雄
第二五回	大島圭宇	駒崎正胤	有賀康雄	富永龜太郎
	出窪平八郎	鈴木銀三(戰死)	永瀬勝美	小沼十寸穂
第二六回	細井榮吉	飯野松一	黒澤巖	磯崎節郎
	小高信道	國谷錦之助	石村敬助	藤波柳三郎
	小島五六	小沼義雄	高柳四郎	田中慶治
第二七回	荒井亮	金森一雄	永瀬利雄	齋藤正道
	山田正次	小杉宗平	深田一男	須田方一
第二八回	古要桂次	大貫清衛	眞木眞激	内田太一
	太田耕	澁谷馨	横山太郎	北澤恰佐雄
	黒須政之助	岡村國男		野島利一
	宮崎鐵也			
第二九回	小峯長三郎	加藤騰藏	所春雄	岡村泰繁
	金子贊雄	波邊英敏	三浦亮	林泰助
	新井文司	近藤信一	吉田長之	高田進
第三〇回	矢部俊夫	小沼好四郎	丸山靖文	
	櫻井道雄(戰死)			

第三二回	林義雄	野原律(戰死)	平野壽	大野信行(戰死)
	中村正節	山中頼太郎(戰死)	矢部文雄	小暮正一
第三一回	金子清(戰死)	友光恒	白井政之助(戰死)	山本武夫
	松村常吉	並木庄兵衛	宇田敏夫	三隅文吾
	石田秀文	柏木知一	波邊竹二	齋藤修
	千葉正(戰死)	波多野伴	武井正	
第三二回	田中忠雄	肥留間好	村井竹雄	關根健次
	佐久間吉夫(戰死)	岡武知己	濱野正男	阿部正一
	福田健雄	西村武文	金勝久雄	小山永久(戰死)
第三三回	山口豊太郎	並木芳雄	出井旭	秋松正一
	千田恒二郎	齋藤茂樹	市ノ川定彦	今宿滋一郎
	清水正夫	近藤知之	宮崎一彌	岩崎寛一
第三四回	山田時美	町田正信	土屋常次郎	石川喜夫
	柳澤明治	杉田敬一	福島愿之助	松澤正次
	石井秀治	植木秀太	金子三郎	吉川孝男
	富田正三	桑原咸二	後藤泰治	
	清水一郎	吉岡英男		
第三四回	青木昌包	守屋寅雄	古要恒三	金勝敏雄

第三八回	第三七回	第三六回	第三五回						
磯貝安雄	守屋金次郎	高橋秀雄 會田康二 篠原幹太郎 澁谷良雄	栗本瑋 見留康八 野口忠正 大澤一郎 田村夏男	高橋勝一	榎本勝治(戰死)	小川博久	岡野博邦	原田政次	
澤井豐	須永勝正	鈴木四郎 井山重利 佐々木正	駒宮錄郎 小峰友吉 小野澤元治 湯澤啓次	吉岡和彦	戶張良作	齋藤善次郎	栗原周治	飯村繁	
		石岡浩武	宮崎正道 石井一彦 山下行衛	本橋三郎	松永操	平野勝義	淺見詮次	見富保之	
		栗原忠道	高橋克種 富岡義	荒井巖	北島龍之介	大木健次郎	關正久	關口登	
		土屋春久	金子三四吉						

昭和十三年十二月十五日印刷
昭和十三年十二月二十日發行

浦和中學校同窓會

埼玉縣立浦和中學校內
發行人 土肥政勝
印刷人 金森光雄
浦和市高砂町一ノ二七ノ一
浦和市高砂町一ノ二七ノ一
印刷所 株式會社星野印刷所

